



比叡山宗教サミット

Religious Summit Meeting on Mt. Hiei



——世界宗教者平和の祈りの集い——

日本宗教代表者会議

Japan Conference of Religious Representatives





閉式の辞を述べる山田恵諦名誉議長

「世界の主な宗教指導者が一堂に集い、教義の違いを超えて、世界平和と人類の幸福への祈りをささげよう」

日本宗教代表者会議(JCRR)主催の「比叡山宗教サミット」

—世界宗教者平和の祈りの集い—
が、昭和六十二年八月三日、四日、京都宝ヶ池プリンスホテルと比叡山延暦寺で開催された。

八月四日

世界宗教者平和の祈り

Ceremony of Prayers for Peace by World Religious Leaders



平和の祈りに参加した国内外の代表者（比叡山山頂の特設会場）

このサミット会議に参加した海外代表は、バチカン教皇庁代表のフランシス・アリンゼ諸宗教者長官、東方正教会のパウロス・マル・グレゴリオス世界教会協議会議長（インド）、イスラーム教のM・A・ラウーフ国際イスラーム大学総長（マレーシア）、仏教の趙樸初・中国仏教協会会長、ユダヤ教のヨセフ・B・グレーサー・アメリカラビピ中央会議副議長ら。海外十六ヶ国から仏教、キリスト教、イスラーム教、ユダヤ教、ヒンドゥー教、シーク教、儒教の七大宗教の指導者が参加した。

国内からは日本宗教代表者会議名誉議長の山田恵諦天台座主、教派神道連合会代表出口聖子大本教嗣、全日本仏教会会長の阿部野竜正高野山真言宗管長、日本キリスト教連合会委員長亀谷莊司、徳川宗教神社本庁統理、新日本宗教団体連合会理事長の庭野日敬立正俊成会会長ら約五百人の代表者が参加した。

「祈ることから平和は始まる」

—— 四日午後三時三十分。会議のハイライトである「世界宗教者平和の祈り」は、比叡山延暦寺の大講堂にある大梵鐘をはじめ、ローマ教皇庁、英国カンタベリー、国内の清水寺（京都）、浅草寺（東京）、浦上カトリック教会（長崎）など世界各地の寺院、教会で同時に打ち鳴らす「平和の鐘」を合図に始まった。

続いて、世界宗教者平和の祈り。トップを切ったのは、趙樸初・中国仏教協会会長ら海外の仏教者五人。数珠を手に合掌して経文を唱える。続いて、キリスト教代表者、イスラーム教代表者、ユダヤ教代表者、ヒンドゥー教代表者、シーク教、儒教、諸宗教組織代表者、アッシジ代表者らが次々にステージに登壇して、祈りと祈りの言葉をささげた。それぞれの伝統、作法、服装による平和の祈りのセレモニーを繰り広げた。



EST. 3.4.1987

比叡山宗教サミット
Religious Summit Meeting on Mt. Hiei
世界宗教者平和の祈り式典
Ceremony of Prayers for Peace by World Religious Leaders

主催 日本宗教代表者会議
Japan Council of Religious Representatives



平和の祈りを述べる外国代表（ヒンドゥー教代表）



仏教代表



ユダヤ教代表



キリスト教代表



アッシジ代表



比叡山山頂の特設ステージに立つ各宗教代表



イスラーム教代表



諸宗教組織代表

海外代表者による「世界宗教者平和の祈り」に続いて、国内代表者による祈りが行なわれた。最初は教派神道連合会の代表者五人による祈り。品田聖平神道大教管長の祈りの祝詞が奏上された。続いて、全日本仏教会代表者七人による祈り。小峰順啓全日本仏教会副会長が祈りの言葉を述べた。

このあとは、亀谷莊司日本キリスト教連合会委員長の司祭で、日本キリスト教連合会代表者五人による祈り。引き続き、神社本庁代表者五人による祈り。田中弘清石清水八幡宮宮司が祝詞を奏上。最後に、新日本宗教団体連合会代表者五人による祈り。飯島正三思観会会長によって祈りの言葉が奉読された。

この式典には、海外代表者、来賓、一般招待者千人に加えて数百人の参拝者も会場後方に参列して、代表者の祈りに合わせて合掌する姿も見られた。



各宗教代表者の祈りに合わせて、合掌する参列者



日本宗教代表者(グループ別)による祈り



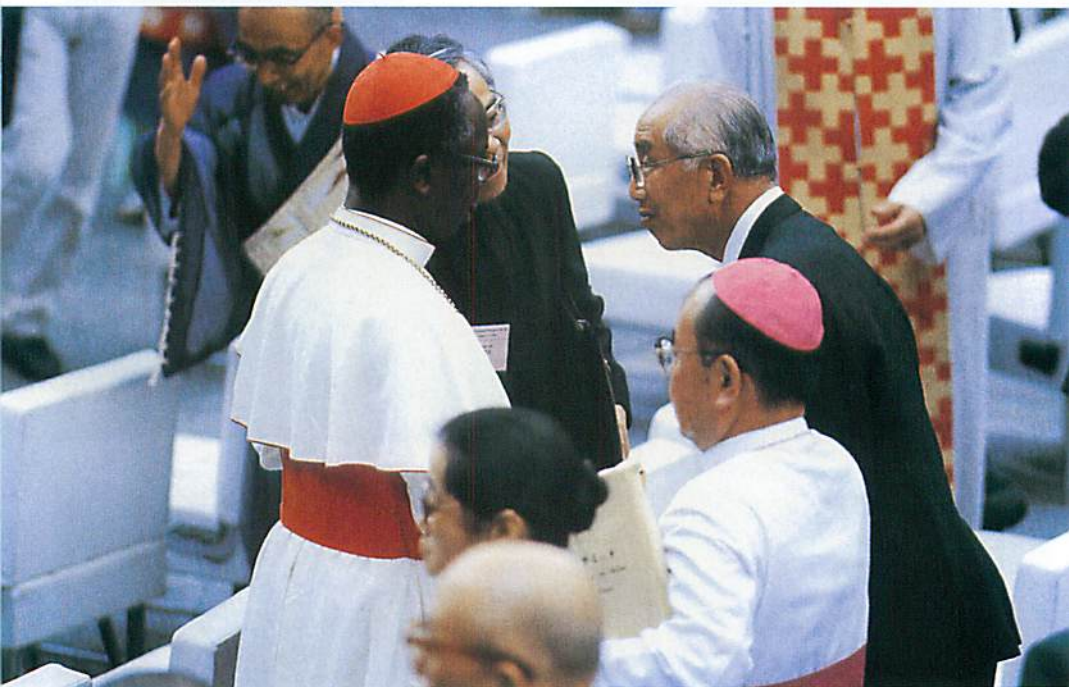
比叡山延暦寺の大梵鐘（上）の「平和の鐘」を合図に式典が始まった



式典を見守る外国参加者

「宗教同士の対立があつてはいいけない。宗教が国際紛争の火種になつてはいけない——」
 ヒンドゥー教徒とシーク教徒が抱き合い、日本の各宗派の代表者が握手し合い、黒人と白人が抱擁し合う——。

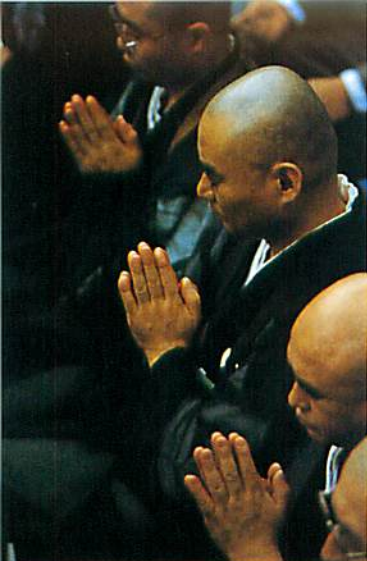
これこそが、宗教サミットの本来の姿であり、宗教対話の光景を見せつけるものであった。



会場で各宗教代表者の対話風景が見られた（庭野日敬名誉顧問とアリンゼ諸宗教省長官）



にこやかな対話風景



平和の黙禱



抱擁し合う世界の宗教代表者

海外代表、国内代表の祈りが
ささげられたあと、参加者全員
が起立して、一分間の「平和の
黙禱」。続いて「比叡山メッセー
ジ」が披露された。
式典も終わりに近づき、関本
肇日本聖公会司祭による「平和
のあいさつ」が行なわれ、最後
に本会議の名誉議長・山田恵諦
天台座主がフォコラーレの少年
少女に記念品を贈呈し、閉式の
辞で午後五時五分終了した。



平和を心に念ずる

八月三日

歓迎式典

Welcoming Ceremony

歓迎式典は、三日午後五時から京都宝ヶ池プリンスホテルのゴールドルームで、国内外から五百人が出席して行なわれた。

江田廣典事務総長の開会あいさつに始まり、海外代表者が紹介された。

このあと、今回のサミットを呼びかけた山田恵諦名誉議長が歓迎あいさつに立ち、「地球上での宗教にかかわる多くの紛争は、なお後を絶たず、また核戦争による地球壊滅という大問題を抱えている。宗教者の取るべき道は、宗教者がお互いを理解し合うことだ。今後とも、こうして一堂に集い、お互いの理解を十分に得られるように願う」と述べた。

これに応えて、海外からの参加者を代表して、チュング・ヒュン・ロ世界改革教会連盟副会長らがスピーチを行なった。



歓迎式典で開会のあいさつをする江田廣典事務総長



歓迎あいさつする徳川宗敬名誉顧問



チュング・ヒョン・ロ氏



エクメレディン・イヘサンオグル氏



歓迎式典に参列した国内の来賓、招待者



歓談する日本の宗教代表者

八月三日

歓迎レセプション

Welcoming Reception



会議の成功を祈って乾杯



なごやかな歓談



国内外の宗教代表者の歓談



瀬戸内寂聴師も参加

歓迎式典に引き続いて、同ホテルのプリンスホールに会場を移して、歓迎レセプションが行なわれた。

庭野日敬名誉顧問（立正佼成会会長）が主催者を代表して開会・歓迎のあいさつ。

「比叡山を開創された伝教大師は、一目の羅は鳥を得ること能わず」と説かれ、相互の協力の大切さを教えて下さっております。平和もまた一人ではできないのであって、宗教者全体が宗

派や教義の違いを超えて、大同団結することが大切です」

このあと、来賓を代表して、荒巻禎一京都府知事、今川正彦京都市長、山田豊三郎大津市長、佐伯勇比叡山法灯護持会会長、中山善衛天理教真柱があいさつを行なった。

続いて舞台では、能楽が催され、参加者の歓談に移った。岡本健治常任委員長の乾杯などがあって、午後八時終了した。



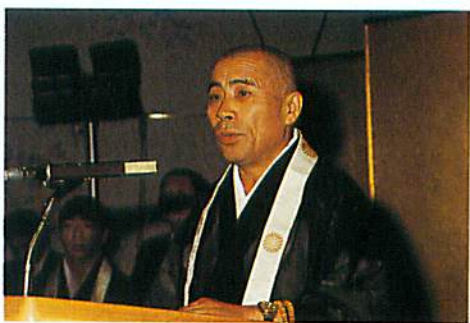
中山善衛天理教真柱



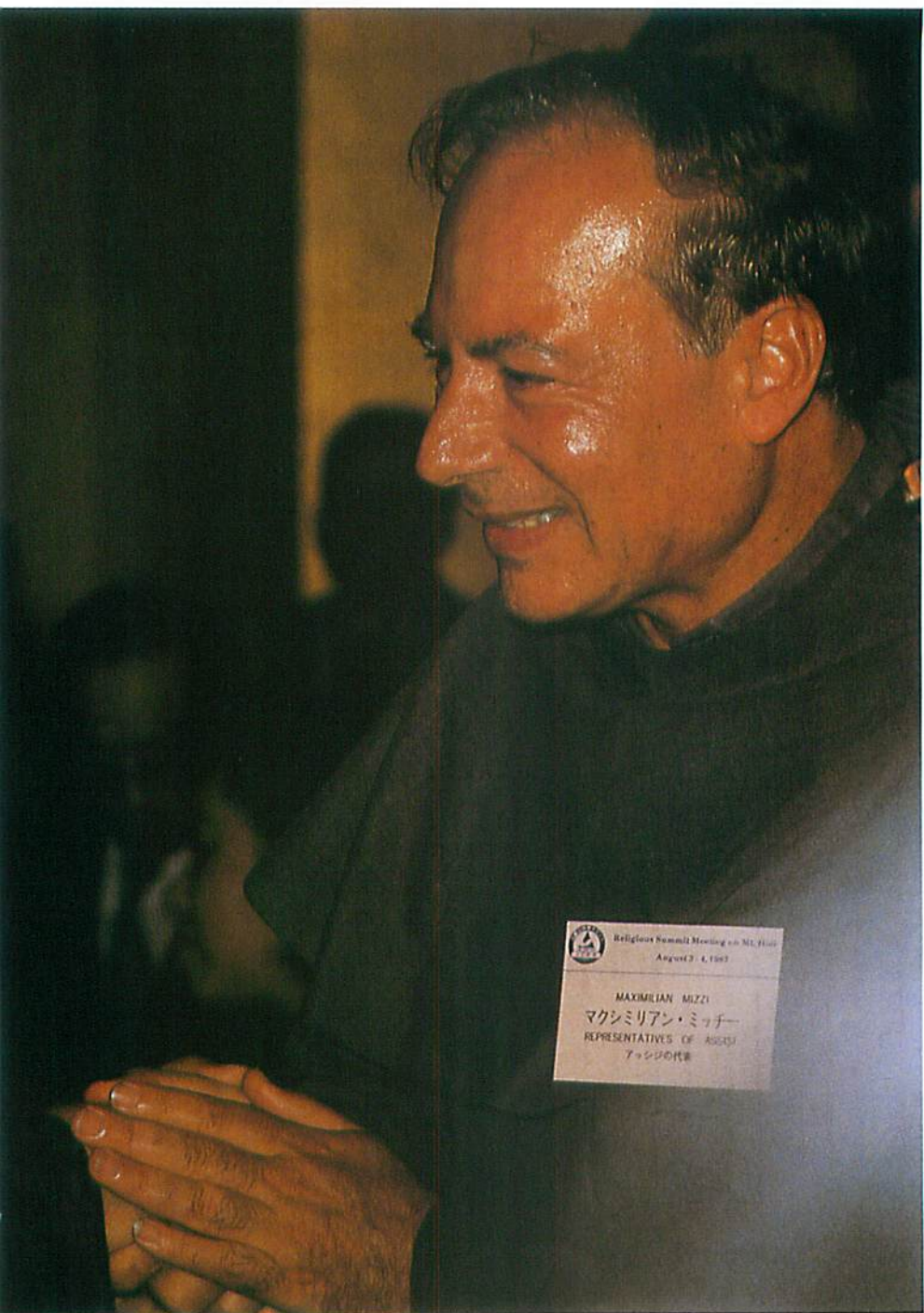
佐伯勇比叡山法灯護持会会長



外国代表者を歓迎して日本の伝統芸能を披露



司会の小林隆彰運営副委員長



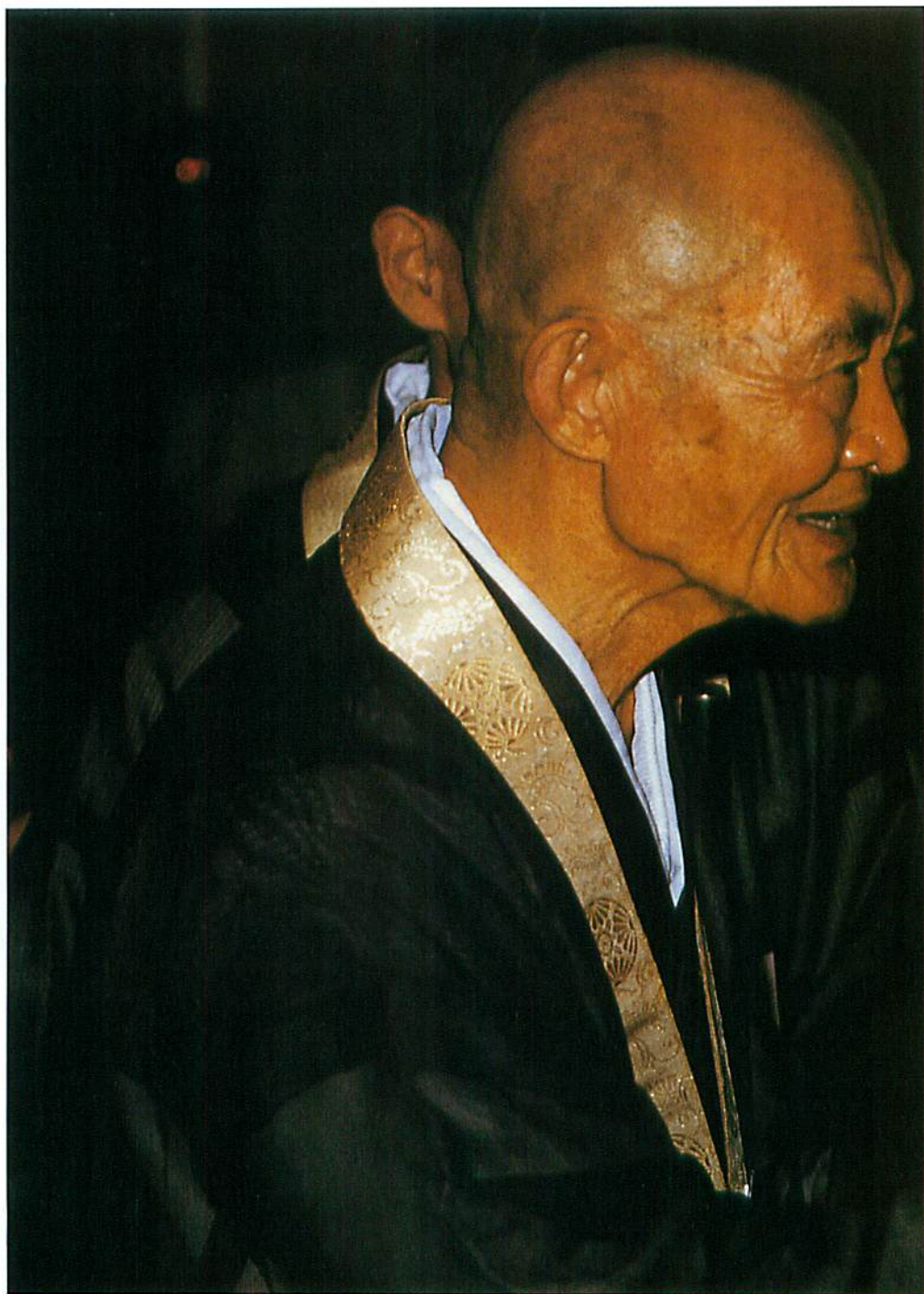
Religious Summit Meeting in Mt. Fuji
August 3 - 4, 1983

MAXIMILIAN MUZZI

マクシミアン・ミッチー

REPRESENTATIVE OF ASOSJ

アッソジの代表



アッシジから比叡山へ。山田恵諦名誉議長とアッシジ代表のマクシミリアン・ミッチー氏が固い握手

八月四日

サミット会議

Summit Meeting

八月四日午前九時、京都宝ヶ池プリンスホテルで「サミット会議」が行なわれた。

開会の祈り、開会宣言、主催者代表開会のあいさつのあと、ローマ教皇メッセージとアズハル総長メッセージが代読された。九時三十分。「平和への道」と題して、各宗教代表者による平和への所信表明が始まった。海外の仏教代表、キリスト教代表、イスラーム教代表、ユダヤ教代表、ヒンドゥー教代表、シーク教代表、儒教代表の提言があり、続いて国内の代表者がスピーチを行なった。

教派神道連合会代表、全日本仏教会代表、日本キリスト教連合会代表、神社本庁代表、新日本宗教団体連合会代表の提言のあと、比叡山メッセージが朗読され採択された。主催者代表の閉会あいさつ、閉会宣言があつて、正午すぎ終了した。



会議に臨む国内の各宗教の代表者



電谷莊司師



木川田一郎師



閉会宣言する田澤康三郎議長団



会議の議長団席



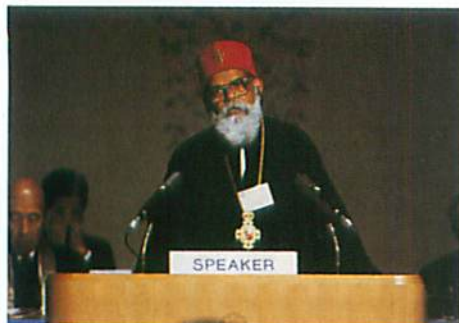
サミット会議では、諸宗教による平和への所信が表明された



キリスト教とイスラーム教の代表者



諸宗教組織代表者



パウロス・M・グレゴリオス師



フランシス・アリンゼ師



宮本文靖師



ヨセフ・B・グレーサー氏



黒住宗靖師



スージャン・S・ワーバン師



モハメッド・H・エルディン師(右)



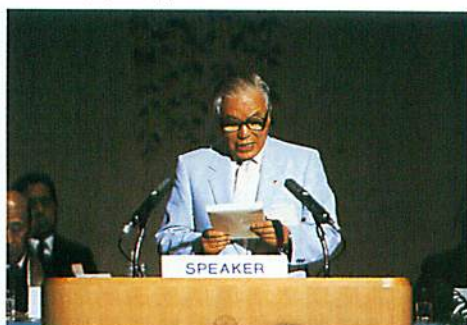
カラム・シン師



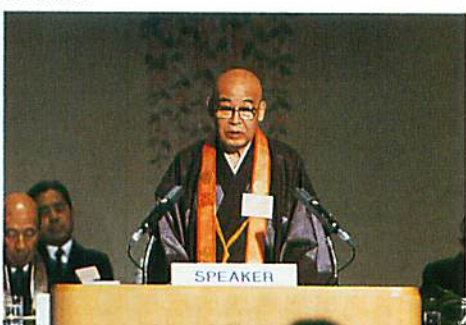
M・A・ラウーフ師



趙模初氏



李炳主師



阿部野竜正師



N・Z・バハハーノフ師



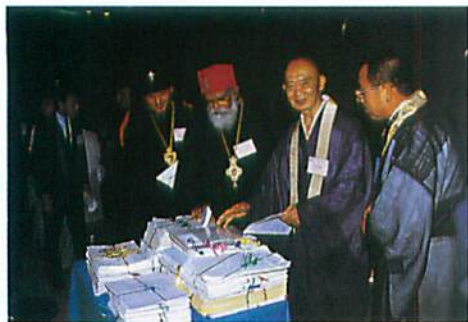
櫻井勝之進師



スナオ・ミヤハラ氏



白柳誠一師



山田名誉議長に手渡された署名



フォコラーレの少年少女の代表

四日、サミット本会議で各宗教代表者の平和の提言が行なわれたあと、カトリック系の神の愛に基づく精神運動団体「フォコラーレ」の少年少女の代表者たちが決意を込めたメッセージを発表し、参加者の熱い拍手を浴びた。

この代表団は英国、フィリピン、オーストラリア、韓国など六ヶ国の男女十二人。メッセージを読みあげると同時に、世界各地で集めた十四万六千余人の署名を山田名誉議長に手渡した。



146459人の署名

八月四日

サヨナラパーティー

Farewell Party

比叡山で「世界宗教者平和の祈り」の式典が終了したあと、会場を再び京都宝ヶ池プリンスホテルに移して、サヨナラパーティーが開かれた。

また、サミット会議を終えたアリンゼ・バチカン諸宗教省長官や主催者の杉谷義純日本宗教代表者会議事務局長らが延暦寺会館で共同記者会見に臨み、「教義の違いを超えて集まった成果を生かし、具体的な行動を起こしたい」と述べた。



Religious Summit Meeting on Mt. Hiei Farewell Party
比叡山宗教サミット さよならパーティー
主催：日本宗教代表者会議 (J.C.R.R.)
4th Aug. 1987



サヨナラパーティーであいさつする小堀光詮常任委員（上）と
ジョン・B・テイラーWCRP国際事務総長

1986.10

アッシジから比叡へ

From Assisi to Mt. Hiei

昭和六十一年十月二十七日、イタリアのアッシジで世界中の宗教者が集まり、それぞれの宗教儀礼で「世界平和の祈り」を行なった。

ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世の呼びかけで、欧米、アジア、アフリカ、南米、ソ連、東欧から、あらゆる宗教代表者約百人が集まった。日本からも山田恵諦天台座主をはじめ、仏教、神道、諸宗教組織、キリスト教代表者九人が参加した。

このアッシジの「世界平和の祈り」から比叡山の「宗教サミット会議」に引き継がれた。



アッシジで行なわれた「世界平和の祈り」でヨハネ・パウロ教皇と会見する山田恵諦名誉議長

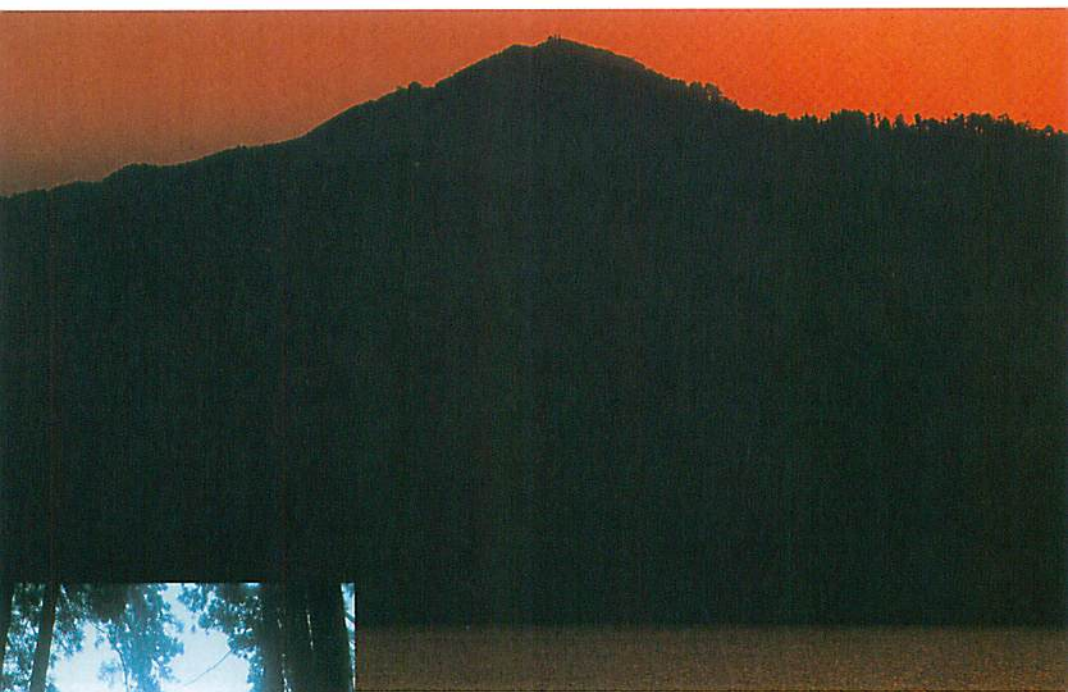
比叡山

Mt. Hiei

比叡山延暦寺の歴史は、延暦七年（七八八）、伝教大師最澄が山中に一乗止観院（現在の根本中堂）を建立した時に始まる。

伝教大師自らが刻んだ葉師如来を安置し、法灯をかかげて千二百年。比叡山宗教サミットが行なわれた今年は、その開創千二百年の記念の年であった。

比叡山は、法然、親鸞、栄西、道元、日蓮、一遍など日本仏教各宗派の開祖がここで学び、日本仏教の母山といわれる。



琵琶湖から望む比叡山の遠景(上)。根本中堂にある不滅の法灯(右)。比叡山西塔にあるに堂(左)

八月五日・六日

ヒロシマ平和祈念式典

Hiroshima Peace Memorial Ceremony

平和への祈りは比叡山からヒロシマへ……。五日朝、比叡山宗教サミットに参加した海外の代表者、国内の代表者らは、新幹線で広島入りした。

参加した海外代表者は、趙模初・中国仏教協会会長、マクシミリアン・ミッチー・アツシジ代表、ジェイムズ・P・モートン諸宗教組織代表、李炳主儒教本部長老らで、「宗教者として、被爆の実相を見据えたい」と固い決意でヒロシマに臨んだ。

五日は、広島到着後、供養塔の献花、原爆資料館見学、原爆病院慰問、記録映画鑑賞をした。六日は、広島県宗教連盟主催の慰霊行事に参列したあと、広島市主催の追悼会に出席し、平和への祈りをささげた。

このあと、ホテルに戻り、比叡山宗教サミット外国代表歓迎会が開かれた。



ヒロシマ平和祈念式典に参列した宗教サミットの代表者



供養塔で献花



広島市主催の追悼会に参加



平和式典



平和式典会場を出る代表者



原爆資料館を館長の案内で見学する外国代表者



広島での歓迎会



ノー・モア・ヒロシマ



慰霊塔に献花された宗教サミット代表者の生花。新たな平和への祈りがささげられた

比叡山宗教サミット報告

まえがき

日本宗教連盟協賛の五団体、並びに世界宗教者平和会議日本委員会、世界連邦日本宗教委員会の実務者による第一回の（仮称）「比叡山宗教サミット準備委員会」が、昭和六十一年四月三十日、比叡山延暦寺において開催され、爾来六回にわたつて準備会議を重ねて、同年八月二十九日に日本宗教代表者会議の規約が制定施行の運びとなりました。

比叡山宗教サミット開催の趣意書には、比叡山開創千二百年慶讃の年を記念し、最澄上人の「己れを忘れて、他を利する」の精神を受けて、人間自身に本具する宗教心によつて、心の荒んだ現代の世相に対し、平和・人権・倫理について、人類の未来に微力を捧げることが宗教者の任務であると自覚して「世界平和祈りの集い」を開催することを決議したと述べられています（本文別記）。

ここにおいて、名誉議長、名誉顧問を頂点とする十一種類、三百十一名に及ぶ役員の組織を整備し、業務を分担し着々準備が進められるかたわら、外国招請宗教代表者の検討をする等、精力的に運営委員会や事務局会議を開き、その業務は多忙を極め、深夜に及ぶこと屢でありました。

招請のための外国使節団も数次に及び、それぞれ奉仕活動で有り難いことであつたが、大きな成果を得て、仏教・キリスト教・イスラーム教・ユダヤ教・ヒンドゥー教・シーク教・儒教・諸宗教

組織等を網羅し、参加者は十数ヶ国、三十数名を迎えることになりました。

昭和六十二年八月三日、四日の比叡山宗教サミットを目前にして、七月二十九日最終の会議が開かれ準備は万全を期して進められたが、若干不安のある中で、日時は容赦なく過ぎて行く。日程、部署、会場準備、更に広島訪問等について万全を期し、特に警備に関しては、充分配慮して万全に備えたのです。

八月三日、愈々本番を迎え、宝ヶ池プリンスホテルにおいて、内外参加者の受け付け、歓迎式典、歓迎レセプション等盛況に行なわれ、すべてはスムーズに運び成功でありました。

八月四日、午前九時から宗教サミット会議が開催され「平和への道」について諸宗教代表者による平和への所信表明の提言が発表され、予め起草委員会で用意された比叡山メッセージが採択されたのです（主文は別記）。

その後は比叡山頂へ移動、十五時二十分会場へ入場行進、十五時三十分開式・平和の鐘（世界中同時に打鳴）、次いで祈願、折りから空は曇天、雨にならぬかと心配されたが、神仏の加護か、不思議に暑からず絶好の天候に恵まれ、それぞれの宗教ごとに、特徴を生かし祈りが捧げられました。この祈りは日本国中津々浦々に広がり世界各国に広げられたのです。黙禱・挨拶・メッセージの披露があり、ローマに本部をもつカトリック系の神の愛に基づく精神運動団体フォコラーレの少女が宗教サミットの成功を祈り、支援を求めて集めた四十七ヶ国十六宗教十四万六千四百五十九の署名伝達があったことは、感激を深めました。晩はプリンスホテルでサヨナラパーティーが盛会に

開かれ、比叡山宗教サミットの成功を祝いました。

八月五日～六日は、広島原爆投下四十二周年慰霊祭に参加して深い感銘を受け、全ての行事を終了しました。外国代表はそれぞれ宗教ごとの世話で解散となったのです。

私は比叡山宗教サミットの事務総長という大役を仰せつかり微力な自分を深く感じましたが、準備から行事まで多くの大徳方及び役員の人々に助けられ、行事進行の責任者としての任務を大過なく果たさせていただいたことを心から感謝しております。

また、世界宗教史上未曾有の大行事が何の事故もなく、恙無く終了し、宗教代表者の満足がいただけたことを無上の喜びとしております。最後に、「比叡山宗教サミット」の本旨である世界の平和と人類の幸福が助長されると共に、サミットの整理と纏めが関係各位に満足を得るよう祈り、ご協力下さった多くの皆様にお礼を申し上げて、序といたします。

比叡山宗教サミット事務総長 江田廣典

比叡山宗教サミット

・目次

カラー口絵

1

比叡山宗教サミット報告

25

まえがき

比叡山メッセージ

開催趣意書

名誉議長あいさつ

会議日程・内容

39

会議日程

歓迎あいさつ

来賓あいさつ

サミット会議開会あいさつ

ローマ教皇メッセージ

アズハル総長メッセージ

フォコラーレのメッセージ

平和への道——諸宗教による平和への所信表明

57

仏教代表

キリスト教代表

イスラーム教代表

ユダヤ教代表

ヒンドゥー教代表

シーク教代表

儒教代表

教派神道連合会代表

全日本仏教会代表

日本キリスト教連合会代表

神社本庁代表

新日本宗教団体連合会代表

「世界宗教者平和の祈り」次第

資料

開催までの経過

日本宗教代表者会議規約

日本宗教代表者会議組織図

日本宗教代表者会議役員名簿

海外参加者リスト

共同記者会見と報道関係者

「比叡山宗教サミット」に関するマスコミ報道

あとがき

比叡山メッセージ

一九八七年八月三日、四日、比叡山開創一千二百年を記念して、平和のために祈るべく「比叡山宗教サミット」に参集したわれわれ、世界の諸宗教の代表者は、世界平和に真摯な思いを寄せる宗教者および他のすべての人びとに対して、心からのメッセージを送りたいと思う。

平和のために祈るべくわれわれがこの地に共なることは、一九八六年十月、諸宗教の指導者が集ったアッシジにおける世界平和祈願の日のあの開かれた精神をいまここに継承するものである。かの地を集った宗教指導者たちは、自らの宗教的伝統を忠実に守り、自らの信仰を貫きながら、しかも今日の悩める世界に対して、平和と人間の大義に献身しようとする宗教共通の決意を力強く証しようとした。

平和の願いは、いかなる宗教にとっても根本的なものであることをわれわれは認識し、かつ主張する。そもそも平和とは、単に戦争がないということではなく、人間どうしの睦み合う融和の状態、人類共同体の実現をいう。およそ正義や慈悲のないところに平和はない。かかる平和こそ、すべての宗教者によって誠実に希求されなくてはならない。

われわれが祈るとき、われわれはまず平和の務めに相応しからぬことを認めざるをえない。そのゆえに、より忠実に献身しよう、自らの内面的革新をひたすら乞い求める。平和のために祈ることは、平和のために働くこと、そして平和のために苦しむことですらある。平和の大義に対する奉仕と犠牲は、さまざまなかたちや方法であらわされ、紛争の解決、核兵器および通常兵器の軍縮、開発、環境の保全、人権、難民への配慮、不正な社会制度の変革などに資する働きとして具現されるであろう。宗教者は、常に弱者の側に立つことを心がけねばならない。

われわれの使命はあまりに大きく、われわれの力はあまりに小さい。それゆえわれわれは、まず祈りから始めなければならない。われわれを超えた大いなる力によつてわれわれの真実の祈りは聴かれ、われわれの切なる願いは顧みられることをわれわれは認識し確信する。祈りや瞑想、さらに感謝を通して、われわれの心と思いは浄められ、ささやかなりとはいえ平和のために役立つものとならしめられるであろう。

平和のために祈るべくここに集まったわれわれの営みが、世界の到るところで繰り返され、繰り広げられ、全人類が渴望してやまないこの大いなる平和の賜物が、われわれの時代に与えられんことを切に祈る。

開催趣意書

世界はいま、政治・経済・文化・交通などあらゆる分野で多くの問題を内包していることは周知の通りであります。

即ち科学技術の驚異的な発達とは人類に未曾有の繁栄をもたらした一方、様々な格差や歪みを生み出しています。そして、物質文明の波は人間の欲望を際限なくふくらませているのが現実であり、このような時代に地球を救済し得るものは人間自身に本具する宗教心以外に無いと言われております。

しかしながら、その宗教心の淵源たる世界の各宗教が相争つたり、相互に全く無理解であつたとしたら、一体どうなるでありましょう。過去の永い人類の歴史の中で宗教の果たしてきた役割は大変大きく、同時に一方では民族間・国家間の抗争を助長した場合も少なくありません。それ故、人類の未来を予見するとき、各宗教間の協力こそ宗教者に課せられた重大な使命の一つであるとともに、人類に対する宗教者の責務を全うする一助になると思われました。

このような意味で、ここ数十年来、世界における宗教協力の気運が次第に高まりを見せていることは喜びにたえないところであります。これは、御尊師を始めとする各師の献身的な御協力のたまものであり、それぞれの信仰を尊重しつつ、しかも互いに協力し合わなければ真の平和はあり得な

いと信ずる宗教者の真心の現れであります。人類にとつても重要でありながら常に脅かされている平和・人権・倫理など多くの問題が宗教者という共通の基盤に立つて真剣に協議せられ、或いは実行に移されて次第に成果をあげつつありますが、この努力はたゆむことなく続けて行かなければなりません。

一九八一年二月、ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世陛下が御来日の砌、日本宗教界の指導者を前に、挨拶されましたとき、「皆さんの偉大な教師である最澄の言葉を用いるならば『己れを忘れて他を利するは慈悲の極みなり』云々」と申されて、宗教協力はこの精神がもつとも大切であることを述べられました。

さて、その最澄上人が開かれた比叡山は、今年一千二百年の記念すべき年を迎えました。この機会に日本の宗教界の指導者、宗教協力に御熱意を示しておられる先達方に呼びかけ、本年八月三日、四日の両日、世界の代表的宗教指導者を、比叡山にお招きし、世界平和祈りの集い『「比叡山宗教サミット」』を開催して、宗教間の絆を一層強め、世界の平和に寄与することが出来ればと願ひたしております。それ故、日本宗教連盟協賛の五団体を中心に、世界宗教者平和会議日本委員会並びに世界連邦日本宗教委員会の御協力を得て主催団体としての、「日本宗教代表者会議」を組織し、その総力を挙げてこの行事を完遂することを期したいと存じます。

つきましては、誠に恐縮に存じますが御尊師におかれましては是非御理解と御賛同をたまわりお力添えを下さいますよう切に懇望いたします。

名誉議長あいさつ

名誉議長 山田恵諦

世界の各地から、それぞれの宗教教団を代表せられて、「比叡山宗教サミット——世界宗教者平和の祈りの集い」に御出席下さいました皆さん、御遠路ようこそおいで下さいました。

主催者であります日本宗教代表者会議を代表いたしまして、心からお礼を申し上げ、熱烈に歓迎いたします。

仏教・キリスト教・イスラーム教・ユダヤ教・ヒンドゥー教・シーク教・儒教・民族宗教、さらには世界宗教者平和会議本部、理解の殿堂などから、その組織の中でも、最も重要な立場におられる皆さんをお迎えすることができましたことは、私の無上の喜びであり、神仏に対して心から感謝いたします。また、比叡山宗教サミットの趣旨に御賛同ただいて代表を御派遣下さった教団と、御辛勞をかえりみず出席下さった御代表の皆さんに深く敬意を表するものであります。

この会合を催すに至る発端は、一九八一年、ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世聖下が来日のおりに、日本の宗教家を招かれてのご挨拶の中で、世界平和実現の基本は宗教間の相互協力が最も必要であることを述べられ、中でも、日本宗教界の古い指導者である最澄が「己を忘れて他を利するは慈悲の極み」と述べた、この慈悲の精神でなければならぬと強調せられたことに深い感銘をうけ

ました。そして、秘かに世界の宗教者と手を取り合せて、平和を語り、祈りと感謝を捧げたいと念願いたしておりましたところ、日本宗教界の代表的な組織である日本宗教連盟協賛の「全日本仏教会」「キリスト教連合会の有志」「教派神道連合会」「神社本庁」「新日本宗教団体連合会」および「世界宗教者平和会議日本委員会」「世界連邦日本宗教委員会」の皆さんも全く同じ考えでありましたので、共に力を合せることになりました。

時あたかも今年は、最澄が開いた比叡山が、開創一千二百年を迎えましたので、これを好き機会として、比叡山宗教サミットを開こうと「日本宗教代表者会議」を結成して諸準備に入った次第であります。更に、昨年十月二十七日、ローマ教皇聖下のお招きをうけ、私たち九名の者が、アッシジに於ける「宗教者平和の祈り」に参加いたしました。そのときのローマ教皇聖下を始め、カトリックの皆さんの平和に対する情熱と世界各国から参加された宗教者の宗教間協力の姿に強く感動いたしました。

今回のこの集いが只今申上げましたローマ教皇聖下のお言葉と、アッシジの精神、更には日本宗教者の平和を希う情熱を抛り所として開かれ、世界の代表的宗教者を迎えることが出来ましたことは、この上ない幸せであります。ひとえに神、仏のご加護のおかげであります。

さて、宗教協力の輪が第二バチカン公会議を契機に、世界宗教界の趨勢となりつつありますことは、地球と人類にとって大きな喜びであります。

しかしながら、地球上での宗教にかかわる多くの紛争は、なお後を絶たないことも事実であります。

す。そこには政治・経済・民族などのむずかしい問題がありましようが、核戦争による地球壊滅という何ものにも替え難い大問題を抱えています。私たちはこれらについて、その対応が不十分であったことを深く懺悔いたします。また、平和をもたらしべき宗教が、相手の言葉に耳を傾けず、自己の主張のみに囚われて互いに争っていたのでは、地球上には平和はやつてきません。

宗教者のとるべき道は、まず、宗教者がお互いを理解し合うことから始めねばならないと思います。理解を平和の第一歩として、平和世界の実現という一点を求めて協力したいものであります。

本日、世界の宗教代表者と日本の宗教者がこの一堂に集まって語り合うことは、宗教間の理解と協力を熱望する心の頭れで、この姿こそ神や仏が望まれている聖なる姿だと私は確信いたします。

明日のサミット会議と比叡山上における平和の祈りが、それぞれの宗教の立場で十分な成果を得られますよう念願いたします。そして、みんなの力で、世界平和への足音を一層高らかに踏み出そうではありませんか。終りに臨み、世界からご来臨の諸大徳と、絶大なご協力を賜りました日本の宗教界の皆さん、この催しをご支援下さいました各界の皆さんに深く感謝いたしまして歓迎の言葉といたします。

（歓迎式典のあいさつから）

会議日程・内容

比叡山宗教サミット第1日(8月3日)プログラム

時 間	日 程	式典内容・場所
15:00	外国代表者登録	一宝ヶ池プリンスホテル
16:00	国内代表者登録	
17:00	〈歓迎式典〉	一宝ヶ池プリンスホテル
17:15	開会あいさつ	江田廣典事務総長
17:20	海外代表紹介	杉谷義純事務局長
17:35	歓迎あいさつ	山田恵諦名誉議長 徳川宗敬名誉顧問
17:55	海外代表スピーチ	チュング・ヒュン・ロ エクメレディン・イヘサンオグル
18:30	〈歓迎レセプション〉	一宝ヶ池プリンスホテル
	開会・歓迎あいさつ	庭野日敬名誉顧問
	来賓あいさつ	荒巻禎一京都府知事 佐伯勇比叡山法灯護持会会長 中山善衛天理教真柱
	清興	能楽
	乾杯	岡本健治常任委員長
	スピーチ	今川正彦京都市長 山田豊三郎大津市長
20:00	閉会のあいさつ	津元武一郎常任副委員長

比叡山宗教サミット第2日(8月4日)プログラム

時間	日 程	会議内容・場所
8:20	開場	一宝ヶ池プリンスホテル
9:00	開会の祈り	黙禱
9:05	開会宣言	鈴木日出年議長団
9:10	主催者代表開会あいさつ	庭野日敬名誉顧問
9:17	メッセージ披露	
	ローマ教皇メッセージ	代読・フランシス・アリンゼ
	アズハル総長メッセージ	代読・ホセフ・エルディン
9:30	〈平和への道〉	一諸宗教による平和への所信表明一
	仏教代表	スナオ・ミヤハラ 趙模初
	キリスト教代表	フランシス・アリンゼ
	イスラーム教代表	パウロス・M・グレゴリオス M・A・ラウーフ S・Z・ババハーノフ
	ユダヤ教代表	ヨセフ・B・グレーサー
	ヒンドゥー教代表	カラム・シン
	シーク教代表	スージャン・シン・ウーバン
	儒教代表	李炳主
	教派神道連合会代表	黒住宗晴
	全日本仏教会代表	阿部野竜正
	日本キリスト教連合会	白柳誠一
	神社本庁代表	櫻井勝之進
	新日本宗教団体連合会	宮本丈靖
	署名とメッセージの伝達	フォコラーレ少年少女代表
12:05	比叡山メッセージ朗読	亀谷荘司議長団
	比叡山メッセージ採択	葉上照澄議長団
12:15	主催者代表閉会あいさつ	木川田一郎顧問
12:22	閉会宣言	田澤康三郎議長団

比叡山宗教サミット第2日(8月4日)プログラム

時 間	日 程	式典内容・場所
14:00	受付開始	一比叡山延暦寺
15:10	平和祈願・各宗教者入場	
15:30	開式の辞	櫻井勝之進頭問
15:35	〈世界平和祈願〉 —海外代表— 仏教代表	趙模初 唯 覚 慈 貴 スナオ・ミヤハラ スダス・ウナセカナ フランシス・アリンゼ 尻枝正行 トーマス・ミッシェル スー・ミン・リー ディビッド・ヤング ハートル・ジョン・ルイス ウィリアム・H・ホルウェル メトロポリタン・マカリー パウロス・マル・グレゴリオス モハメッド・ホセム・エルディン ムサ・M・オマル M・A・ラウーフ シャムスディン・カーン・パパハ ーノフ ヤヒヤ・ムニール ヨセフ・B・グレーサー ピンチャス・プレーナー カラム・シン
	キリスト教代表	
	イスラーム教代表	
	ユダヤ教代表	
	ヒンドゥー教代表	

時 間	日 程	式典内容・場所
	シーク教代表 儒教代表 諸宗教組織代表 アッシジ代表 ー国内代表ー 教派神道連合会代表 全日本仏教会代表 日本キリスト教連合会 代表 神社本庁代表	スージャン・シン・ウーバン 李炳主 ジェイムズ・P・モートン ジョン・B・ティラー マクシミリアン・ミッチー 品田 聖平 福光 佐郎 大桃 吉雄 巫部 建彦 出口京太郎 小峰 順督 来馬 規雄 川井 匡俊 加藤 海晃 横山 尚空 高野 一能 佐藤 智仙 日比長義夫 木川田一郎 亀谷 荘司 三末 篤實 田中 健一 八木 成之 田中 弘清 木下 龍美 生嶋 暢

時 間	日 程	式典内容・場所
	新日本宗教団体連合会 代表	小栗栖元徳 中田三貴勇 飯島 正三 佐原 慶治 鉢呂福太郎 深田 充啓 力久 隆積
16:50	平和の黙禱	発声・佐原慶治常任委員
16:51	比叡山メッセージ披露	発表・広瀬静水議長団
16:54	平和のあいさつ	指揮・関本肇参与
17:01	記念品贈呈	山田恵諦名誉議長
	閉会あいさつ	山田恵諦名誉議長
17:05	退場	
17:30	記者会見	一延暦寺会館

広島訪問日程(8月5日、6日)

8月5日㈪	
11:35	(京都発 9:40) 広島着、昼食
14:00	慰霊祭(供養塔)、献花、記念写真
14:30	資料館見学(代表・原爆病院慰問)
16:00	記録映画鑑賞(広島ターミナルホテル泊)
8月6日㈫	
5:40	ホテル発
6:00	慰霊行事参列(広島県宗教連盟主催)
8:00	市主催の追悼会に出席
10:00	比叡山宗教サミット外国代表歓迎会(広島ターミナルホテル)
12:00	歓迎レセプション(昼食)
14:08	広島発 大阪へ

歓迎あいさつ

名誉顧問 徳川宗敬

比叡山開創千二百年にあたる今年、日本の歴史の都、ここ京都の地において、世界の諸宗教を代表される皆様方をお迎えして世界平和の祈りの集いが開かれますことは、まことに慶ばしき極みでございます。

現在、世界の誰しも平和を希求しないものではありません。しかし、その実現は大変むずかしい情勢下におかれています。我々は、昨年のアッシジの祈りの集いにおいて、過去の反省の上に立つて、今後は、平和の使者たらんことを互いに誓い合ったのであります。

今こそ、諸宗教の教義の相違を互いに尊重し合い、理解し合うように努力し、同時に、このような一つの目的のために集合する体験を今後も積み重ねることによって、平和に向かって、一步一步と近づくことができる教訓を勝ちとることができるものと信じます。

その意味からも、今日の皆様との出会いは、重要な意義をもつものと存じます。今後もうした出会いを大切にするため、心より皆様方を歓迎申し上げる次第であります。

（歓迎式典のあいさつから）

来賓あいさつ

天理教真柱 中山善衛

この度の「比叡山宗教サミット」第一日目の、この晴れやかな席でごあいさつをするご指名をいただきまして心から光栄に存じます。

私事になって、はなはだ恐縮ではございますが、私どもの天理教は、ちょうど教祖の口を通じて教えが説きはじめられてから、今年は百五十年を数える節目に相当しているのでございます。比叡山千二百年のことを思えば、まことに微々たる歴史ではございますが、実はその間には並々ならぬ道を経て、ようやく百五十年の今日に辿り着いたと振り返っておりますのが、私の実感でございます。

平和な世界を求めない者は、世界中にはいないと思うのでございます。そのために政治家は政策をもって、あるいは実業家は仕事を通して、教育者はまたその教育を通して、それぞれが、それぞれの分野で求めているのは、住みよい社会であり、平和な世界であると考えてるのでございます。その中であって、私たち宗教家の果たす役割は、それぞれの信ずるところは多少違いますが、信ずる教えを布教するということによって、同じ人間同士がこの地上において助け合って、楽しく暮らすことができる、その道を求めるところにあると思うのでございます。

私はこの度、日本で「比叡山宗教サミット」が開催されました、宗教家の方々をここにお迎えして、祈りを通して一日も早く平和社会の招来を求め合おうという、この企画をされました方々に対して、心より敬意を表すると共に、この会が有意義に過ごされて、各宗派は異なりましても、それを超越して、お互いが心を一つに、共に信ずるところの教えを広め、そしてこれからも、平和社会を求めるために祈り続けてまいりたいということを提言させていただきたいと思うのでございます。

おこがましいことを申し上げましたが、終わりに、ご参会の皆様方のご健勝とご活躍を心より祈念いたしました。務めを果たさせていただきたいと存じます。

（歓迎レセプションのあいさつから）

サミット会議開会あいさつ

名誉顧問 庭野日敬

皆様、お早うございます。「比叡山宗教サミット」の開催に当りまして、一言、ごあいさつを申し上げます。

昨日の前夜祭につづきまして、本日ここに、「比叡山宗教サミット」が、いよいよ本会議の幕を開くことになりました。

人類の未来、地球の将来を考えますとき、果して二十一世紀が安泰かどうか、大いに危ぶまれる昨今であります。長足の進歩をとげた科学は、軍事兵器の底知れぬ恐ろしさをもたらすとともに、資源に恵まれたもつとも豊かな国を、軍備への膨大な支出の故に、逆に貧しい国へと方向転換を余儀なくせしめる事態すら生んで居ります。

一方、戦争放棄の憲法を四十余年にわたって遵守した国は、資源に恵まれぬ条件下にありながら豊かな国に成長するという現象をみせております。国家間の経済関係はもちろん、さまざまな要素や複雑な条件によって左右されるものであることはいままでもありませんが、軍備への支出如何が何をもたらすかを、いまや真剣に考えるべき時でありましょう。

本会議の名誉議長である山田恵諦猥下は、十一年前、アジア宗教者平和会議で、多くの宗教者と

の出会いをもたれました。昨年はまたローマ教皇の提唱によるアッシジでの平和の祈りに、多くの世界の宗教指導者が集い、縁を結びました。宗教者のさまざまな出会いこそ、平和への一里塚であり、この「比叡山宗教サミット」も、そうしたさまざまな出会いの積み重ねの上に実現したものでいえるのではないでしょうか。

「一身并じ難く、衆力成じ易し」。伝教大師が説かれたように、一人では何もできぬが、大勢の力を合わせれば、平和の大事業も可能となります。今こそ、我々、宗教者は大同団結し、この「比叡山宗教サミット」によって、ともされた平和の灯を大きくかけ、そして絶やすことなく、祈りと実践をつづけてまいりたいものです。

酷暑の^{みぎり}砌、この会議にご出席下さいました世界の諸宗教の代表の方々、並びにご参集下さいました皆様方に深甚なる感謝を申しあげ、この会議が実り多い会議となりますよう皆さまのご協力をお願いし、併せて神仏のご加護を念じまして、ごあいさつとさせて頂きます。皆様よろしくお願い申し上げます。

ローマ教皇メッセージ

ヨハネ・パウロ二世

山田恵諦宛下。本日、比叡山におきまして、伝教大師最澄の比叡山開創千二百年にあたり、世界平和祈願式典が開催されます。日本のほとんどすべての宗教団体より構成された日本宗教代表者会議によって、この平和祈願式典が組織されましたことは、誠に慶賀にたえません。

日本は言うに及ばず、全世界から宗教代表者を招集され、バチカンからも諸宗教省長官フランシス・アリンゼ枢機卿が参列しております。

昨年アッシジで世界平和祈禱祭を催しました際、私は平和確立の為の祈りが、かけがえのない役割になつてゐることを強調しました。

平和は、祈りなくしては成就しません。各人がそれぞれ自分の信仰に立ち、真理を求めて祈る、その祈りなくして平和は達成できません。

今日、宗教を信じる人はみな、平和が神からの賜物であり、その賜物を、私達はすべての人々の祈りを通して、神に乞い求めなければならないことをよく認識しています。戦争は少数の人によつて始められても、平和はすべての人々の連帯と協力とを必要とします。

もし、私達が平和と兄弟愛とを求めて、私達の心と叫びを神に上げるなら、どうして神はそれを

お見捨てになりましたか。そして、いろいろな機会に私達は、平和が真の調和を可能にするような人間の生活条件を作り出す努力も、すべての人々に求めていることを思いおこします。

私は、皆さまが、世界平和の為に取られたこのイニシアティブが成功することを心より願っております。

そして今日、比叡山において皆さんが、神のみに人類共通の祈りをささげる時、私の祈りも皆さまと共にあります。

(フランス・アリンゼ・バチカン諸宗教省長官が代読)

アズハル総長メッセージ

シェイク・アズハル

仁恵あまねき慈悲深きアッラーのみ名によって、日本宗教サミット議長およびご列席の皆様へ。

世界の人々を平和に導くための皆様の崇高なる理念が成功しますことをお祈り申し上げます。

不幸なことに今、世界では各地で戦争が発生し人々は苦しんでいます。人類は生命そのものを破壊する戦争の脅威にさらされているとさえいえます。

これは神の啓示にそむくものです。皆様が人々を深く正しい信仰に向かって、そして真理に向かって導かれんことを切望いたします。

真の信仰こそは、国際問題とそして人生のさまざまな問題の救済をするものです。

このサミット会議が世界中の人々に対して、真理と正義と平和の提唱となりますよう心からお祈り申し上げます。真理・正義・平和こそが神の啓示の真理をめざすものであり、幸福と人類救済への道であります。

(モハメッド・ホセム・エルディン・アズハル事務局局長が代説)

フォコラーレのメッセージ

世界諸宗教代表の皆様へ

皆様が、今回再び京都にお集まりになっていることは私達にとって大きな喜びです。昨年のアッシジでの一日は私達に大きな希望を与えてくれました。それは世界の宗教者が兄弟として初めてお互いに顔と顔を合わせた出会いの日であり、人類にとって、「歴史的な」出来事でした。

私達は皆様が世界に与えて下さった一致の証しに心から感謝しています。皆様が示された「お互いへの尊敬」「全てを捧げた平和への努力」「心からの熱心な祈り」によって、多くの人々は平和が必ず来る、そして平和は天に在って私達の祈りを聞いて下さる皆様と共に願い求めることができる恵みであるという確信を強くしました。

私達は「一致を目指す少年少女」です。そして私達の輪は五大大陸、百六十ヶ国に広がっています。お互いに国籍、文化、信仰は違っているけれども、生涯をかけて生きる一つの理想によって、私達は皆結ばれています。それは平和が実現される一致した世界を築くために生きることです。私達は全ての人が一致と平和のために働く使命をもっていることを知っています。ですから、その目的のためにできるだけ大勢の人達に協力を呼びかけたいのです。

誰にでも同じ愛をもって接していく時、私達は人種、宗教、世代などの壁が崩れていくのを体験します。そして、私達の間の違いは障害となるのではなく、それは、かえって「愛の文明」において一致にいたるためのかけがえのない献げ物であるということに気が付きます。

将来は私達にかかっているとよく言われます。私達はこの挑戦を受けて立ちたいのです。ここで皆様に特別にお願いしたいことがあります。私達が人類の将来のために一緒に生きてゆきたいと願っているということを、皆様の教団の少年少女達に是非伝えていただきたいのです。もし一日一日皆で共に築いてゆくなら、全ての人に平和な将来がくることを確信しています。

どうか私達を信頼して下さい

。一致を目ざす少年少女。

平和への道

— 諸宗教による平和への所信表明 —

I 仏教代表

サンヤ・ダルマサクティー

世界仏教徒連盟会長

この度、世界の各宗教の代表者が一堂に会して、「比叡山宗教サミット」が開催されるにあたり、「平和への道」について発言する機会をあたえられましたことを、大変光栄に存じます。

世界仏教徒連盟は、三十五ヶ国、七十以上のセンターが加盟しておりますが、その目的について、世界仏教徒連盟定款の中に次のように述べられております。

すなわち、それは、「すべての人々の間に、平和と和合をもたらし、生きとし生けるものに幸せをもたらすために活動すること」であり、「志を同じくする他の諸団体と力をあわせ、そのために努力すること」であります。

この世界仏教徒連盟の目的は、仏陀の説かれた教えと一致するものであります。法句経などの經典に書かれておりますように、仏陀は弟子たちに平和について深く思いをいたし、平和への道をきわめよと説いておられます。さらに、平和は無上のものであり、平和にまさる幸せはないとも説いておられます。

さて、平和と一口に申しますが、平和は、外なる平和、すなわちこの世の中における平和と、内なる平和、すなわち心の平和の二つに分けることができると思います。

この世の中において平和を成就するための道については、色々と説かれておりますが、ここでは、そのうちの二つだけについて言及したいと存じます。

第一に思いやりです。和合をつくりだすものは思いやりであります。思いやりとは、

第一に、布施―分かち合うこと。

第二に、愛語―愛情のこもった言葉で話すこと。

第三に、利行―人のためにつくすこと。

第四に、同事―相手の立場に身をおくこと、であります。

第二に、次の六つの徳のある行いをするのであります。それは、

第一には、思いやりのある行動をすること。

第二には、思いやりのある言葉で話すこと。

第三には、思いやりのある思惟をすること。

第四には、寛容な心をもつこと。

第五には、道徳を保つこと。

第六には、正しい見解をもつこと、であります。

心の平和を達成するためには、仏陀は次のように説かれております。貪欲―むさぼること、瞋恚―憎みいかること、愚癡―迷いまどうこと、を滅じ、そしてついにはこの三毒を滅せよと。

世界仏教徒連盟を代表して私は世界の人々のために、ここで相手を思いやること、寛容であること、やさしい言葉をかけること、互いにたすけあうこと、そして他の人々を尊ぶこと、この四つを是非実践に移すことを提案させていただきますと存じます。

そして、こうしたことは仏教徒だけの信条としてではなく、すべての人々の生活の指針としていただきたいと願うものであります。

また、先程申し上げた人間の煩惱、すなわち貪欲、瞋恚、愚癡を滅ずることによって、真の平和が世界の人達にもたらされると信ずるものであります。

すべての人々が、憎しみがなく、悪意がなく、そして苦しみがなく、幸せでありますようにお祈り申し上げます。ありがとうございます。

(代読Ⅱ世界仏教徒連盟副会長・スナオ・ミヤハラ氏)

Ⅱ 仏教代表

趙 樸初

中国仏教協会会長

比叡山延暦寺建立千二百周年記念に当たって、日本天台宗が日中友好三山連合法会を厳かに執り行なったことは、二十一世紀に向けて日中両国の仏教徒や両国人民の伝統的な友好関係をさらに強化、発展させるうえで、大変有意義なことでした。今日、日本仏教の各宗派と日本の各宗教団体の共催による「比叡山宗教サミット」が正式に幕を開け、世界の各宗教の代表が一堂に会し、誠実かつ友好的な対話を行ない、宗教合作の道を探り、宗教が平和運動の中での積極的な役割を今までも増して発揮しようとしています。人類の運命について心から責任感を抱いている人なら誰でも、この会合と対話が世界平和の維持にとって如何に重要であるかその意義を低く評価することはありません。

特に指摘すべきことは、山田恵諦座主をはじめとする日本天台宗の各役員の皆様、ならびに日本仏教の各宗派、各宗教団体の各指導者の方々が、比叡山延暦寺建立千二百周年記念活動を日中両国の伝統的な友好関係の発展、国際宗教合作の促進、世界平和の維持などの重要課題と関連づけ

ていることであり、疑いもなく、これは長期的な展望と高い識見に基づいた配慮であると申せましょう。

この厳かな演壇において、世界平和と宗教合作の問題についてまず私見を述べさせて頂いて、それから会議に参加した各宗教家の皆様に教えを乞いたいと思います。

当面の世界情勢は、確かに積極的に緩和へ向う多くの兆候があります。しかし、人類社会に危機が深まることを示す兆候もまた少なくないのです。氣違ひじみた核軍備競争、危険な軍事衝突、テロの横行、人種差別主義の横行、国際金融不安、生態環境の汚染と破壊、社会の富の占有の不公平、世界人口の膨張等の問題は、あたかも黒雲の如く人類の心に恐怖と不安の陰をさしています。こういった問題の発生原因は多岐に渡っているので、問題解決にも各階層の一致団結、協力が必要です。

宗教の本質は平和の追求にあります。各宗教の最終目標は、個人の心の平和と人類の生存環境の平和です。私達中国仏教徒は毎朝必ず平和祈願をし、「国境の安寧、国民の安楽」を心から願っています。仏教徒の平和への憧れと追求は、全ての衆生に平等に思いを馳せる仏陀の大慈悲の心の現れです。仏陀の布教の最大任務の一つは人類の心の浄化にあります。

仏教の「勤修戒定慧、息滅貪嗔痴」に関する教義の重点は、如何に自分の心を浄化し、知恵を開発し、煩惱から脱却し、円満の境地に達するかを人々に指導することです。

仏教の五戒、十善、四摂、六度に関する教義の重点は、如何に人類の相互共存の生活環境を浄化し、国土の安寧、衆生の安楽、世界の平和を実現させるかについて人々を指導することです。この両面における浄化は表裏一体、かつ相補的なものであり、仏教では、客観的な環境の浄化は、主観的な心の浄化を前提とする、との考えに立っています。その理由は明白です。なぜならば人と人との間の付き合いは、双方に誠心誠意の協力精神と誠実な友情がなければ成り立たないからです。

超大国の核軍備削減に関する会議が遅々として進まないのは、その政府当局者に人類の未来への関心と嚴肅な責任感が欠如していることと無関係ではないのです。人類への深い愛情をもって、平和の崇高な目標を実現するために、多くの戦士は絶えず戦い、甚だしきに至っては大切な命までささげてしまうこともあったのです。

これでも分かるように、人類の心の浄化―仏教についていえば、布施で以って貪心を転化させ、慈悲で以って瞋心を転化させ、智慧で以って、痴心を転化させれば、衆生一

体、万物同心の広い心のもとで、人類の生活に正確な方向付けをし、主権を主張し、世界の恒久平和に導くことが可能となります。

宗教界は、当面の核脅威反対、世界平和維持について、特に重大な使命を負っています。効果的に作業を進め、人類平和維持の面における宗教の積極的な役割を十分果たすため、各宗教の団結と協力は非常に重要です。

「宗教合作」の思潮は近代に興ったもので、今日、人類は新しい深刻な挑戦に直面しているため、宗教合作はより差し迫った、より重要な急務になっています。事実が示すように、各宗教が一致団結して協力体制を強化しなければ、人類の現状改善、人類の未来に奉仕するという重大な任務を十分果たすことは不可能です。

宗教合作の前提は、人類の福祉と平和維持にあります。宗教合作の内容は、次に挙げるいくつかの意味を含むべきであると考えます。まず国について言えば、各宗教の間には相互尊重、団結合作の問題があり、同じ宗教の内部には各教派の間の相互尊重、団結合作の問題があります。国際的にも同じことが言えます。やはり異なる宗教間の協力という問題もあれば、同じ宗教の各教派間の協力という問題もあるのです。しかしここで重大な原則問題について各宗

教の協力を強調することは、必ずしも各宗教の伝統と特色及び各国の宗教組織の自主独立を損なうものではありません。むしろ、各宗教が独自の伝統と特色を保ち、各国の宗教組織が自主独立を保ち、互いに平等に接してこそ初めて原則的な問題について誠心誠意、協力することができるのです。

ここで「求同存異」という中国の格言を御紹介したいと思います。世界全体について言えば、戦争反対、平和維持は全人類の最高利益を代表する「大同」で、あらゆる宗教はこの「大同」を求めています。しかし、各宗教には独自の伝統と特色があり、その伝統と特色に基づいて自主独立を保ちながら、伝道活動を行っていますが、これが「存異」ということです。中国には、目下五大宗教があります。そして各宗教の内部にもそれぞれ派閥があるのですが、私達はまだ「求同存異」というこの原則に基づいて宗教合作を実現したのです。

宗教はこれまで人類の歴史上最も影響力の強い精神的、社会的な力でした。目下、世界中の各種宗教の信者たちは、世界人口の三分の二以上を占めています。宗教はこれほど大きな社会的影響力を持っているのです。ですから、宗教合作は世界の平和と安定に重要な役割を果たすことでし

う。国際宗教界が各自、自主独立、相互尊重、相互平等に基づいて、団結と協力を強化し、宗教が持つ仁慈博愛・救世利人の偉大な精神を発揮し、人類の道徳心向上、生活環境浄化をはかり、人類を一日も早く核戦争と通常戦争の脅威と破壊から解放し、恒久平和と安寧を勝ち取るよう心から希望します。各国の宗教人が団結し、さらに各国の宗教人と各国の人民が団結して世界平和の為に奮闘しさえすれば、必ず世界の恒久平和を勝ち取ることができると私は信じて疑いません。ご静聴ありがとうございます。

III キリスト教代表

フランシス・アリンゼ

バチカン随員

我々、多数の世界的宗教の代表たちがこの歴史的な山に集い、平和について熟慮し、平和のために祈り、精進し、平和の道にすむことを改めて誓うのは喜ばしいことです。これが、イエス・キリストを信ずる者として、いかなる平和への道があり得るかについての私の見解であります。

1 平和には相互愛が必要です

我々の隣人を愛することが、平和の必須の礎であります。この愛は、単なる温情とか好意とか礼儀などと考えるべきではありません。我々の生きている世界には、疾病と栄養不良、不正と抑圧、暴力と軍備の増強、個人にも国家にも、富める者と貧しき者の間に重大な不均衡があります。このような状況で、我々はいかなる平和運動ができるでありましょうか。

我々キリスト教徒は、この質問に対する回答をイエス・キリストにみます。彼は、いかに隣人を愛するかを我々にお教えくださいました。我々は彼の教えについて瞑想しま

す。その教えには「平和をつくり出す人たちは幸いである。彼らは神の子と呼ばれるであろう」(マタイによる福音書第五章の九)があります。さらに我々は彼が為したもうた奇跡に彼の哀れみをみます。彼がいかに敵を、不当にも彼に死を宣告した者たちをすら赦したもうたかをみます。彼がいかにその生命を全人類のために与えたもうたかをみます。彼は自ら言われました。「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない」(ヨハネによる福音書第十五章の十三)と。

イエス・キリストの有名な使徒の一人である聖パウロは、彼の師の生涯の意義を考察して隣人愛について書いています。「愛は寛容であり、すべての人々に情深い。愛は決してねたむことはしない。それは誇らないし、高ぶらない。愛は決して不法をしないし、自分の利益を求めない。愛はいらだたない。恨みをいだかない。不義を喜ばないで真理を喜ぶ、愛は他の人々を許し、大目にみてやり、信頼し、和解が可能であることを希望し続け、危機や逆境の時に耐える用意ができている。」(コリント人への手紙参照) 隣人愛こそ実に確固たる平和の礎であります。

2 平和のためには折らなければなりません
平和を探究するうえで、我々は、国際連合や善意の諸政

府、政治交渉や経済交渉、その他もろもろの組織といった手段の助けを得ています。しかし何よりもまず祈りが必要です。祈り瞑想することによって、我々人間は自足できないばかりか、一段と高い力と存在があり、平和を確立し存続させるためにその助けを必要としていることを認識します。祈りと瞑想は心を誠実にし、我々が過ちを犯すものであることを認めるのに役立つています。祈りは我々が神の御心に従って生き、偽りと偏見にみちた態度を放棄させる助けになります。祈ることによって、自分達の努力のみでは成就できない平和という贈り物を与えたもうよう神にお願いします。

祈りと瞑想は、我々が気持ちを静め、真正の内なる平和、平穏や、自我の実現を達成し欲望や情熱を抑制し、心情を浄化するのに役立ちます。祈りは、万人が同胞であるという自覚をもち、それに応じて行動するの役に立つのです。我々はキリスト者として、イエス・キリストが世界の救世主であり、平和をもたらす人であることを信じています。父なる神とすべての人間とを、はたまた我々お互いとを和解させるために、そしてまた神が人間の心に君臨したもうところの正義と愛の霊的な王国を築くために、キリストが十字架の上で死にたもうたことを信じます。平和は神の聖

鹽の贈り物であり、我々が祈るために集う時はいつも請うているものであることを信じております。

今日のこの集いは、さまざまな世界的宗教の代表者が祈りの重要性を高く評価していることの証左であります。昨年十月アッシジでの世界平和祈禱の日に教皇ヨハネ・パウロ二世陛下は、こう述べられました。「かように多くの宗教指導者が一堂に会したことは、本質的に、交渉や政治的妥協とか経済的な取り引きの結果ではなく、平和に至る今ひとつの次元があり、平和を推進する今ひとつの方法が存在することを現今の世界に感知させる働きかけである。それは祈りの成果であり、そしてまた宗教は多様であっても、それは我々人間の能力を超越する至高の力との関係を表している」(ヨハネ・パウロ二世のアッシジでの講演「*Osservatore Romano* 一九八六年十月二十七・二十八日)

3 平和のためには全員の協力が必要です

開戦の火蓋をきり、戦争を続行するためには僅かの人々で足りません。平和のためには全員の協力が必要です。数人の人々が平和を希求するだけでは十分ではありません。万人がそれを熱望し、すすんでそのために行動しなければなりません。正義・他者の人権と尊厳の尊重・自己規制・万人に対する愛といった平和の必須条件を人類のなかにつく

り上げるために奮闘努力して平和への熱望を示さなければなりません。平和行動には貧困や疾病・低開発といった状況を救済し、軍備縮小を追求し、共通の福祉を推進する活動に関与することも含まれます。

この集いが、我々全員にとって、平和へのより大きな誓約を示す一助となり、様々な宗教の信仰者として平和促進に更なる協力をはかるものとならんことを。

IV キリスト教代表

P・M・グレゴリオス

世界教会協議会議長

名誉議長山田恵諦現下、葉上名誉共同議長、広瀬様、日本及び海外の各宗教の代表の皆様、私共の三百を越えます世界の改革教会は百ヶ国以上にございますが、ご挨拶を申し上げます。

比叡山延暦寺の開創千二百年記念の年であるということでございますが、その時に日本宗教代表者会議がこの祈りの日を組織していただいたこと、そして平和と正義と人間の尊厳のための断食の日をもうけていただきましたことを感謝申し上げますと共に、来日以来素晴らしいお持てなしをいただいておりますことに、あらためて感謝申し上げます。私が、ここで述べます意見はあくまで、私見でございます。決して世界の改革教会の連盟の公の立場ではございません。私の私見であると受け止めていただきたく思っております。

平和は戦争がないということではない、それは確かでございますが、また戦争がないという事も平和の条件でしよう。私共は戦争のない世界、さらには戦争するための武器

を持たない世界を作らなければなりません。非現実的に聞こえるかもしれませんが、世界から疾病・飢餓・栄養失調・無知をなくすことが私達にとって、現実的にあるのと同様に戦争や武器をなくすことも、また現実的な問題でございます。戦争を除去する武器を廃絶するためには、私たちはビジョンを持たなければなりません。と同時に、万人が行動をそれに向かっておこななければなりません。私共は勇気を持って未来に過去とは違うビジョンを持たなければなりません。悲観主義は怠惰であります。

戦争は常にあつたし、これからも続くだろうという怠惰な悲観主義の愚問に下つてはなりません。確かに過去の部族社会においては、手にできる武器を取り、争いは繰り広げられてまいりました。しかし、その争いも終焉、民族国家が作り上げてまいりました。当時はそんな事は、非現実的だと思われていたでございます。今や部族はお互を信じ合い近隣に輪を求めて共存することが出来るようになったのでございます。

民族国家も人類史からいえば、たった短い一片でございます。それを越えまして狭い民族国家に対する忠誠を世界国家、地球国家に対する忠誠に切り換えていかなければなりません。ビジョンがなければ、それはつくれません。

そのためには、平和のための地球的な運動を起こしていかなければなりません。

核兵器ばかりでなく戦争のためのすべての兵器を廃絶していかなければなりません。しかし核兵器をまず廃絶することは最初のプラヨリティでございましょう。なぜならば、核兵器は非人間的だからでございます。非人間的である核兵器は、存続する道理がございけません。国家の指導者達は異口同音に核兵器があるために一九四五年以降、世界に安全が保障されてきたということを申します。しかし、これは誤りでございます。

一九四五年以降、核兵器の備蓄化はますます積み増されてまいりました。しかし、それで戦争が廃絶されたでしょうか。国家の安全保障が保障されたでしょうか。そうではございません。核兵器が存在することによって、私共の安全はますます脅かされているのが今日ではないでしょうか。一九四五年以降、実に百五十の戦争が戦われてまいりました。今日こうしております時にも戦われております。核兵器があるから戦争が終焉するという理論、これは根拠がございません。

核兵器を使用することは犯罪、人類に対する犯罪でございします。これは疑う余地がございません。悲しい事は万国

の中で唯一の国が人を破壊するために原爆を使用しました。これは人類への犯罪でございします。日本に対する犯罪だけではございません。ある意味では、これは人類全体に對して、この罪を私共は感じなければなりません。

人類に対する罪を私共がその負担を感じなければなりません。この犯罪の犠牲者は皆が犠牲者でございします。広島と長崎への悲劇、これは人類全体に対する悲劇だと受け止めなければならぬのではないのでしょうか。その意味では、人類すべてがこの犯罪に對して、共に責を負う必要がございします。この犯罪は一回過去に起こりましたが、再び繰り返す事のないための責任を人類が共同で負わなければなりません。その犯罪に對し、すべてが罪の意識を持ち、核兵器であろうと、その他の兵器であろうと大量破壊の兵器を廃絶する努力をしていかなければなりません。インドであれ、どの国であれ、このような人類を破壊する兵器を作り、そして備蓄して使用する権利はございません。これは非人間的な兵器だからでございします。願わくば、アメリカ合衆国の偉大な国民がまず、その国民のプラヨリティとして世界から核兵器を抹消する行動を起こしてほしいと思います。核兵器を過去に使ったのはアメリカが唯一の国だからでございします。確かに、ソ連とアメリカとの話し合いが進

むことによりまして両国の間に核兵器を廃絶しようという真摯な意図が存在するということを思えるかもしれません。しかし、米ソ両国ばかりでなく、すべての国々が二十一世紀に入るまでに核兵器を廃絶するというコミットをしなければなりません。どの国も例外ではございませんが、すべての国が核兵器を廃絶するばかりでなく、けっして核兵器を今後作ることはないという約束をしなければなりません。そのような人類の協定を破るような国は他国によってボイコットされてしかるべきだと思います。

私共の言葉では「パラヤ」と申しますが、鼻つまみ者として人類社会からボイコットされるべきであり、その国とはコミュニケーションもしない、貿易もしないというような扱いを受けるべきでございます。そのような方向に向かって動くべきだと思います。道義の力をもつてのみ核兵器を止められるのであり、核兵器をもつて力を止めることはできないと思うからでございます。そのような考えは化学兵器・生物兵器を含めるすべての、またはレイザー兵器を含めエネルギー兵器、その他陸上、海洋、宇宙、大気の兵器を廃絶する人類の動きに盛り上げていかなければなりません。このビジョンは決して非現実的なものではないでございます。そのビジョンを現実にするため、今努力を開

始しなければなりません。時間はあまり残っておりません。放置しておくことは兵器を作り、製造し、兵器を貿易する人たちだけが利益を得ているのでございますが、その人達にさえも人類の全体の善のために、働きかけなければなりません。

平和は人の心に生まれます。平和は心の中に生まれるものです。平和は電磁波のように、平和を愛好する人びとから平和を愛好する人びとへ、心に平安があり、祈る人達的心へ広がっていきます。世界人口の四十億の人間がなんらかの宗教に属しているといわれております。四十億人といういわれる人びとの宗教の指導者が協力をして平和のために協力的にやっていくならば、これは平和ばかりでなく、すべての核兵器の即時廃絶のために武器のない世界を作るために、そして平和と尊厳と自由と公正な社会を作るために、祈りを続けていくならば、神の加護が必ずや私共に与えられ、世界がそれを受けて、神の平和の世界に移ることでございましょう。この二つの努力は共にさなければなりません。心の平安は世界の平安にはすぐ続くものではありません。その努力の調整が必要でございます。神の平和が世界に訪れますように。平和が皆様にと与えられますように。

V イスラーム教代表

M・A・ラウーフ

国際イスラーム大学総長

全能なる神の名において、今日私共はここに集^もつております。日本の宗教代表者会議の皆さま方のご努力におきまして、このような集いを持つことができることになりました。

もともと慈悲深き神が、最後の審判の日に私共に対してガイダンスを与えてくれます。全能なる神、これまでの演説者がおっしゃいましたように、全能なる神は平和を唱導しておられます。平和こそ最も重要な皆様方の信仰の現れであります。イスラームという言葉は、平和を意味いたします。イスラームにおきましては、神は平和なりであります。そして、また、天国においても正しい座が、平和を愛する者に与えられます。二百万以上の人たちが、メッカに集まりました。男女の信者たちが、アブラハム、エシマルたちがおりましたうちに集まりまして、そして、平和のために祈ったのであります。

全能なる神よ、平和を与えたまえ。そして、平和を思つて、お互いに挨拶ができますように。

また、神はコーランの中においても、私共に教えて下します。全ての人類は一人の男及び女から生まれたのである。したがって人類は、一つの地球の上で神のもとに合体すべきである。結合すべきであると教えております。

この屋根の下に、全能なる神が私共全ての宗教者の方たちを一堂に集うことを許しております。イスラム教を信ずる者たち、またキリスト教徒、そして他のいろいろな宗教を信ずる人たち、神を信ずる者は全て、平和を愛し、審判の日にも、平和を愛する精神があれば苦しむことはないでしょう。私共は平和のための祈りを捧げております。皆様方の聖典の中にもあるでしょう。「神を信ずる者、アッラーを信ずる者」。これは全てに皆さま方の上に啓示があったに違いない。

私共はそのいろいろな予言者があつても、神の前にあつては、予言者の差別をつけることはできないのです。神は、いろいろな特典を私共に与えて下さいました。しかし、これまでも多くの方たちがお話になりましたように、また、他の宗教者たちがお話になりましたように、時には、私共の宗教を誤用することがあります。広島、長崎の原爆投下で、犠牲は十分ではないでしょうか。そして、核兵器、そして通常兵器が、非常に蓄積され、今や人類の滅亡の危機さえ

与えております。科学技術の進歩によって、このようなことが可能になってきております。もともと科学技術は人間の福祉のために存在したものでありますが、人類の存在さえもおびやかしております。私共はこの危険に対して眼をさまし、そして、何らかの手を打たなければならぬのであります。核兵器、通常兵器の危機に終止符をうたなければなりません。神はその示威のもとで私共は長い間祈りを捧げてまいりました。そして神に対して正しい方向にお導き下さるように、私共は祈っております。私共がお互いに結合することができるよう、連帯をもつことができるように、そして平和を達成することができるようにと祈っております。

祈りは効果がございます。しかしながら、その効果性を高める努力をしなければ、平和はありえません。正義なき平和はありえません。平和を維持するために、その土地を追われた人たち、そしていろいろな苦しみをもっている人たち、この人たちをもとに復帰させてあげねばなりません。やはり、唱導が重要であります。全ての人たちがそれなりの権利を持たなければいけない、そして神を信じ、そして信仰の自由を、そしてまた発言の自由を与えなければなりません。尊厳をもって遇される、そして自分の生きる糧を

得、そして社会のために、そして人類のために貢献するべく権利を与えるべきであります。これらの権利を剝奪された人たち、この人たちの権利は回復されなければなりません。祈りを行う前にこれらの権利を回復する必要があります。神に対して、正しい方向に進むことができますように祈ろうではありませんか。

この会議を通じまして、効果的に、そして実践的に平和を回復することができますように、祈るものであります。そして権利を剝奪された人たちの権利が回復されるように、努力をしたいと思っております。この「比叡山宗教サミット」もその目的をもっているわけであります。ガイダンスと、そして人類の統一のために、平和のためへのガイダンスを与えたもうことをお祈りするものであります。

VI イスラーム教代表 S・Z・ババハーフ

中央アジア・カザフスタンイスラーム委員会議長

兄弟の皆さま、天地万物の創造主、神に、この重要な国際会議の成功をお祈りいたします。この会議が開かれておりますのも、世界の出来事が過去の世界と、今の世界とを別なものにしているからに違いはないと思います。

平和は、単に戦争がない条件ではない。戦争を始める脅威の原因を除去する、これが平和であるという考え方が、各国、各民族の間に現在浸透し、巨大な大衆の意識の力が高まってきております。同時に人びとは、平和はほつておいては出来るものではないということを実感するに到っております。平和を築くためには、精神的にそして物理的な努力を意識の高い真摯な気持ちを持った人たちの間で出さなければならぬという自覚がございます。全ての悪の力の謀略、侵略、抑圧の力は人類を核戦争の破局にもたらそうと謀略をしておりますが、それに対抗する努力がなければならぬという認識がございます。

平安のうちに来たれ、という創造主のこの言葉の深い意味が、多くの人びとによって、今日理解されるに到っております。

ります。その理解があるということは、私共の希望を強める力でございます。それは、私共の条理をもって、意志をもって、今世紀末までに核兵器を廃絶する可能性が出てくるからでございます。

人類を核兵器から救おう、二千年までに人類を核兵器から救おうというソ連の始めましたこのイニシャチブは、善意を持つ人びとの平和への希求の表現の凝縮された形でございます。ソ連の平和のイニシャチブがどんどん出されておりますけれども、それはソ連の中距離射程のミサイルをヨーロッパ地域ばかりではなく、ソ連内のアジア地域においても除去廃絶しようという用意によって、裏づけられております。

この宗教サミットに集合しております私共は、アジア・太平洋地域の重要なセンターに来ております。このアジア・太平洋地域というのは地球の中でも重要な場所でございますから、ソ連のイニシャチブではこの地域の安全保障に対して、重要な意味をもつものと考えます。そして個人の平和と、それから集団の平和を希求する利益にかなうものと考えます。ソ連のイスラーム教徒は、ソ連の国民と同様に、このアジア太平洋地域における平和の動きを支持するものでございます。核兵器のない世界を作る運動に支持

をしております。私共は、ソ連のイスラーム教徒は、不変の平和を作る闘志に積極的に支持をしております。この数年間タシケントでございますとか、サマルカンド、モスクワ、ルシヤンベンなどで会議を開いてまいりました。昨年のものでございますが、国際イスラーム会議がバクで開かれました。バクは、アグビジャンの首都でございますが、その会議のテーマは「平和に闘争するイスラーム」というものでございました。参加者は六十カ国からの六百の宗教を代表する方々でございましたが、異口同音にこの地球から核兵器を廃絶するために共同行動を起こそうということが支持されました。また今年に入りましてからは、すでに有名になっておりますモスクワで開かれました人類存続のために核兵器を廃絶するフォーラムに参加いたしました。このフォーラムではあらたな国際協力の必要性がうたわれておりました。異なる職業を持つ人たち、異なる世界感を持つ人たち、時には真正面から異なった意見を持つ人たちがこの地球という惑星全体に対する責任を感じるが故に、そして文明の存続のために相違を越えて協調する必要性が認識されました。

この「比叡山宗教サミット」が、この世界の平和を強化するために偉大な貢献をされることをお祈りすると共に、

神が私共の祈りを聞きとげ、神の意志を貫くために私共の力を与え、各国の万民の人たちの兄弟の関係と協力を強化するために加護が与えられることをお祈りするものでございます。

最後になりましたけれども、是非、お願いしたいことがあります。それは、私共のこの会議の最後に採択いたしますドキュメントにおいて、不変の平和、核戦争による破局を防止するため積極的に信者に呼びかける言葉を入れていただきたいと思います。

VII ユダヤ教代表

ヨセフ・B・グレーサ

アメリカカリビ中央会議副議長

聖書のはじめの言葉は、次のようなものです。

「はじめに神は天と地とを創造された。地は形なく、空であった……」

聖書の原語であるヘブライ語で「空」、つまりボイドにあたる言葉はトーフ（無）です。これは「空」即ち、物質は欠如しているものの実在の根幹を成す状態を、やはり意味するタオとの驚くべきつながりと見てとれます。原語の類似性が、ユダヤ教は初期において東アジアから何らかの影響を受けたとよく言われる説を裏づけています。

天地創造まで、時間のみが存在していたと推察されます。天地創造によって、空間、物質、物事、事柄が導入されました。つまり、ドルや円、輸出品と輸入品、自動車、ラジオ、コンピュータ、麻薬、金、土地、重大ニュース、女性、電波、飛行機の着陸権、海上輸送路、王室、大統領、聖職者が出てきました。そして戦争。

所有権。我々は果たして何かを所有しているのでしょうか。もし神が、いかなる目的をもってそうされたかはとも

かく、万物を創造したということであれば、所有しているのは神であり、我々はその管理者にすぎません。このことを人々に何とか伝えられないでしょうか。それによって我々が平和の道を見出すことができないでしょうか。やってみる価値はあります。この実態がつくり出されたそれに対して、我々が争い、だまし、奪い、戦争してまで手にいれようとする神の創造物とは何でしょうか。タオやトーフの高みにまで至ろうとしている現代科学は、全ての物質の根幹は、つまり全ての存在を構成している以上分化できないという、基本的な単位は無である。空であると判定しています。陽子でもなく、中性子でもなく、イコン、アイコンでもない無です。全ては見せかけです。

こんなことをいうのは、あまりにも形而上学的で、宇宙論的で、人々の頭をひねらなければならないようなものではないでしょうか。人々に試してみることではできません。何かをしなればなりません。我々は精神をいやすべき者であります。そして人々の精神はまさに病んでいます。患者ともいえるべき人類が、血を流し死に向かっているのを手をこまねいて傍観しているわけにはいきません。

実存と所有に関する意識の変革をもたらすことが必要です。そしてここに集まった我々は、それぞれの宗教圏にお

いて世俗的指導者と、精神、魂のカウンセリングを行うことばかりでなく、人々を一体化させるささやかながらも有意義なプロジェクト、または組織づくりをめざす一連の動きをしなければなりません。その一例として、中東の全ての国々の青年を対象にした紅海沿岸での開催はどうでしょうか。これによって、いかに多くの誤解がとけることでしょうか。固い絆で結ばれた友情が育まれることででしょうか。また、全世界の神学の学生の交流プログラムはどうでしょうか。今回の宗教サミットで代表者が一人か二人ばかりの宗派を集めて、参加を望む全ての聖職者を歓迎する世界宗教の会議を開催するのはいかがでしょうか。

昨夜遅く、京都のグループからメッセージを受け取りました。このグループは一月間に一時間だけ同時に祈りを捧げようではないか、全世界で同時に祈り、瞑想しようではないか。という非常に簡単ですっきりした提案をしてくださいました。もちろんそれは私どもも支援することができると案です。

ヘブライ語のシャローム、これは平和と訳されておりますが、これは単に平和という言葉から連想するような、戦争の停止ということだけではなく、もっと広くシャロームとは、総体性、完全性を意味しています。対立関係にある

当時は、その対立者との融和なくしてはシャロームは得られません。ですから、両者がこの総体の一部でなければならぬのです。全ての人が関わらなければ、シャロームは得られません。

全ての人々だけでなく、総体性と完全性を充たすには、正義、自由、潤沢のすべてが必要です。すこしは執着心をなくすこと、空間に対しての執着心をなくし、全ては無であることの認識に基づかなければなりません。これが精神世界への旅の第一歩です。そして抑圧された人々の声を聞き、犠牲者の声を、囚人の声を、飢えに苦しむ人々の叫びに耳を傾けること、そして、こういうことを人々に説くのが、我々の使命なのです。

VIII ヒンドゥー教代表

カラム・シン

ヒンドゥー運動総裁

山田先生、この歴史的な宗教サミットに集会されました皆さま、マスコミ界の皆さま、人類の歴史を通じて、山は常に神聖なものと見なされてまいりました。山が壮大であるが故、また天へ向かってそびえるその様が、神との一体化を望む人間を象徴していたからでございました。インドでは、ヒマラヤ山脈で何千年も前に自らの悟りの境地を開いた賢人たちが何千にもわたる、ヴェーダーと呼ばれる聖歌を作り、今日のヒンドゥー教の基礎を開いたのでございます。

この宗教サミットで私は、今回ヒンドゥーの代表として来ておりますが、そんなことから今回のこの宗教サミットが人びとの尊敬を集めておられる山田恵諦師の声によって、日本仏教の揺籃の地であるといわれますこの比叡山で、しかも日本の文化の中心であるこの美しい京都の町で開かれておりますことは、喜ばしいことでございます。

私がおりますインドは、ブッダの生誕の地であり、文明の曙を迎えたといった精神の太陽が燦然と輝いている所で

ございます。そのインドから日出ずる国の日本へ友愛の言葉を持ってまいりました。どうか偉大な世界の代表と一堂に会するこのサミットが、普及的な意識を形成する上で重要な役割を果たさんことを祈念いたします。普及的な意識を形成することこそ、核時代を生き抜くために一番必要なことでございます。

人類は今、転換期の苦しみを味わっていると申せましょう。遊牧社会から農業社会へ、工業文明社会へ、そして脱工業化文明へと変革していった時の苦しみに匹敵する新しい転換の苦しみでございます。この二、三十年、科学技術の進歩はめざましく、「地球化」という言葉で表わされます新しい状況が出てきております。民族や宗教は、イデオロギーの分裂は依然として残っておりますが、政治の分野、経済、コミュニケーション、文化のあり方に「地球化」の状況はあきらかに見られる時代となりました。四十年前に広島と長崎に投下された原爆によって、核時代の到来が告げられました。人類がこの核時代を生き続けるために、そして何十億年もの間、古代の海の泥から人間の意識をつくり出し、育んできたこの美しい地球を、破壊に追いやるなためにも、全ての障壁を取り除いて人類全体を一つの大きな家族に結集してゆく新しい地球規模の文明を作ること

が求められております。

その前提となるのが、世界の平和でございます。地球からの動きが高まっている一方でこの新しい文明を支えていく地球的な意識の方は十分に高まっておりません。そのために、もっとも危険な状況が出てきております。片方で地球化が進展するにもかかわらず、他方人類のほとんどの人が、特に政治家の人たちがそれを受け入れる意識の進展がないからでございます。この意味で世界の宗教の果たす役割は緊急かつ重大だと申せるかと思えます。

宗教は音楽や哲学や芸術、文学や建築といった創造力を要する分野で偉大なインスピレーションの源ともなっておりますが、おそろべき争いをもたらす根幹となっておりまして。このような争いの歴史にもかかわらず、世界の偉大な宗教は計りしれない洞察力で、人間の意識をより高めることができ、この時代の要請に応じて答えていかなければいけません。一筋の黄金の糸のように世界の宗教の伝統を貫いておりますのは、世界の平和と人類の兄弟愛、神から授かった慈愛の心でございます。今日、これを見直す必要がございます。そして新しい地球意識に貢献していかねければなりません。ヒンドゥー教は世界の中でも最も古い宗教的な伝統であるかもしれませんが。ヒンドゥー教

の五つの普遍原則をご紹介します。と思います。

ヴェーダーンダと呼んでおりますが、これは人類の問題の啓蒙化に役に立つものと考えております。

まず一番目に神の慈悲ということがございます。これは、地球であれ、それから宇宙の全ての星にも適応されるのでございます。

二番目に民族、宗教、イデオロギーを越えてこの神の魂が人にはあるということでございます。これを精神的な自覚に高めてゆくことが必要であるということでございます。

三番目に人は全て神のイメージであるならば、人類は一つの大家族に属するという考え方でございます。人のきずなの方が、分裂よりも強いということでございます。

四番目の考え方としては、宗教の希求は全て目的が同じだという考え方でございます。人が神のイメージであるならば、それが内外的なものであれ超越的な捉え方をするものであれ、男であれ、女であれ、生まれが違ったという偶然と同じようにそれは分裂の種にはならないということでございます。表現は、いろいろございましょう。これは太陽の光が不可分でありながら、いろいろな像に反映されることと同じでございます。異なった表現があっても、神の

心理は、一つだということでございます。

五番目の考え方として、人間の生活は二重であるということとあります。精神の解放とそして肉体の安楽安命でございます。これは決して仙境なその民族や宗教によつて解釈されるのではなく、万人の幸せという形で解釈されるべきでございます。ですから、この精神の希求というのは、単なる内なるものではなく、人類全体の福祉のために安寧のために外に向かつて具現されるべきであるという考え方でございます。

この五つのヒンドゥー教の考え方は、現在の分裂的な哲学の大体的な考え方を示すものでございます。核兵器の相互破壊破壊というキチガイ、マッドという言葉がございしますが、それに答える考え方でございます。ヒンドゥー教ばかりでなく、ここに代表されておられる全ての宗教でこのような考え方がございましょう。

この宗教会議を一つの成果として世界の偉大な宗教の伝統や考え方の普遍的な原則をうたった一つの出版物を出してはいかかと思ひます。また、平和のための祈りの時間を満月の夜に毎月一回、十一時〜十二時までの一時間祈りの時間にとつてはいかかでしょうか。宗教が異なつても、地球意識を作ろうという人たちは受けとめることができる

提案ではないかと思ひます。

人類は運命の十字路に今日立つております。古い時代はすたれ、新しい時代が生まれようとしております。この世代に与えられた責任は、金の橋を作ることでございます。その橋を未来に向かつて、人が渡ることができるような橋を作ることでございます。

この尊嚴ある比叡山に集う私どもは、神に対して陽に明を、心に自愛を、肉体に力を与えていただくように祈ろうではありませんか。ウパニシャッドが何千年前にも申しましたように、私は「暗国の向こうに太陽のような輝きを見た、その輝きを知ることによつて、死を克服することができ」る。これが不変の生命への橋であると思ひます。

IX シーク教代表 スージャン・シン・ウーバン

ユニバーサルテンブル代表

今日の指導者の皆様方、現在、私共の存在そのものに平和が必要になってきております。現在、人類は絶滅の危機の瀬戸際に立たされております。米・ソの武器としては、五万の核弾頭がございます。ということは、一人あたり三万トンのTNT爆弾があるということの意味しています。核兵器だけではありません。化学兵器、生物兵器がございます。非常に大きな破壊力をもっております。また、最近のレーザー光線、またいわゆるスターウォーズの現状をみますと、ただただ恐ろしいばかりでございます。通常兵器が現在、ヨーロッパにおいて、すなわちNATO諸国、ワルシャワ条約諸国の中で、即応体制をもっております。中距離核などもあります。

科学はもともと人間に平和と繁栄をもたらすものであったはずですが、しかし戦争の武器をつくり、多くの各国間の紛争と競争をもたらしました。また埋めることのできない格差を持っております。核を持てるものと持たざるものとの間で、持てる者が持たざる者の運命を左右し、そして

相互確実破壊、確執の中で互いに覇を競争し合っています。科学は今や誇大妄想狂の役に立っているようであります。このような恐ろしい兵器の配備によりまして、戦争は事故、または情報の誤りによっていつでも始まる可能性があります。誰かが不注意でボタンを押したことによって、多量虐殺をストップすることもできませんし、また警告する時間さえほとんどないのが現状であります。和解が必要であります。したがって、対話を始めることによって、緊張を緩和することが必要であります。これこそ現在の紛争の状態に対処する唯一の文明的な方法といえましょう。対話を成功させるためには次のようなことが必要であります。

まず第一に、狭い「国家」という概念を捨てなければなりません。また、常に自国が正しいという考えも捨てなければなりません。人類を一つのものとして地球を村として扱わなければ、我々は今後とも問題を抱えていくことになりましょう。相互依存性は認識しているわけですが、力は正義なりという考え、これはもはや陳腐なものであります。第二次世界大戦以来、百五十の戦争が第三世界で起こっております。それぞれの戦争が第三次世界大戦にエスカレートする可能性があるのです。したがって、和解を地域レベルで始めなければなりません。そしてさらには、よ

り緊密な通商、また友好的な関係を結ぶことによって、戦争を阻止せねばならないのです。

第二の条件として、不正義がある限り、戦争または戦争の危険があります。一分間に三十人の児童が食糧がないが故に死んでゆきます。世界の軍事予算は、米ドルにいたしまして一分あたり百三十万ドルです。そして新しい原子力潜水艦一隻あたりが、一億六千万の子どもを抱える二十三の開発途上国の教育費にも匹敵するのであります。

一九八三年、一億エーカーの農地の生産調整のためにアメリカの農家には代償が支払われました。一方、四億五千万の人たちが第三世界で飢餓にあえいでいるのです。これが公正といえるでしょうか。また世界には数百万人の難民がおります。家庭も家もそして職業さえ失われ、施し物で生きているのが現状です。これが正義といえるでしょうか。

世界の人口は、紀元二千年までに六十億に達すると予想されております。そして、その後あつという間に、八十億に達すると予想されているのです。人口過剰になります。

そして、ほとんどの人が飢餓にあえぐでしょう。二千年までに第三世界は十億の雇用を捻出せねばなりません。特に若い人たちがむけです。これが政治的な制度に対して圧迫を与え、時には紛争が起こる可能性があります。しかし、我々

が有意義な生活、しかも経済的な成功に基づいた有意義な生活と満足をもたらすことができれば、このような政治的な紛争を避ける可能性もあるのです。

平和は戦争がないだけの状態をいうものではありません。豊かな生活を満たします。生活を後退させてはいけません。また人間の尊厳を必要といたします。飢餓、疾病、そして無知に人間が落とされられては、その尊厳を守ることはできないのです。また全ての人間は、神の子としての自由を享受させなければなりません。

ガンジーは言いました。「ナイタリム」という教育制度を主張しております。これは、創造的で職業志向で、そして大衆が享受できるような教育であります。これが唯一の答えといえましょう。ガンジーは人づくりをいいました。近代の教育の目標は、人づくりでなければなりません。独立、健康、平和を愛し、協力的でそして社会の資産となりうるような人づくりをと彼は主張しております。私どもは地球の環境をも破壊しようとしております。これは創造主がバランスよくつくられたものであります。そしてまた、再び作り出すことのできないような天然資源を枯渇させようとしております。ということは、我々の子孫が地球を享受できないということを意味いたします。

宗教の役割がありますが、平和の役割を果たすことができます。しかしその条件としては、権力を志向する人たちに宗教が誤用されてはならないということであり、仏陀、マハヴィーラ、キリスト、ナーナクの精神にもとらなければなりません。彼らは質素な生活と高尚な思索を唱導しております。また、貧しい、そして疾病に悩む人たちに對するいたわりの心、そして善行をもつて競争せよといっております。勇氣と希望をもつて、複雑なそして予想しがたいような状態に對して対処せよといっております。愛こそが全ての疾病への万能薬であります。そして全ての宗教は愛を説いております。そしてこのたえず変わりゆく環境に對して反應しております。神はまだ創造を得たわけではありません。神は今なお作業中であります。その、人間という製品は今なおつくられつつづけているわけでありまして、まだ完成しておりません。人間だけではなく、生きとし生ける物も一緒であります。将来の人間は愛を持ち、そしていたわり合いを実行することになるであります。そして環境を取り戻し、地球を自国だけではなく全世界のためにつくり直すことになるでしょう。

全ての国は相互依存です。地球市民、地球政府こそ将来の政治的な態勢となるべきであります。全ての宗教家は愛

と平和を説きますが、しかし、いろいろな形式的なことや儀式に時間をとります。彼らの役割を今、並べてみましょう。

まず第一に、この多元的な社会を受け入れるということがあります。文化も違い、心情も違う、イデオロギーも違うという社会の現実を受け入れるということであり、神は、それぞれの宗教が繁栄するように導いておられるのです。

第二に、飢餓、疾病、そして不正を除去するべく努力をすべきであります。第三に、簡素で正直な、そして真摯な生活の仕方を説くべきであります。そして、思いやりとわがち合いを実行することです。

第四に、あらゆる意味での戦争を禁止することであり、国際的な紛争を調停するための對話を進行すべきであります。神の大国は私共の教えを守れば我々のものになるでしょう。

この「比叡山宗教サミット」が、今後ともに続けられますように。そして、たびたび会合をもち、全ての宗教が平和をもたらすために努力できますようにお願い致します。この「比叡山宗教サミット」が、今回組織されましたことに對し、組織して下さいました方たちにお礼を申し上げるものであります。

人々が、そして國家が調和と正義の中で生き、利己心を捨てれば、世界に平和が訪れると信じています。

肉体の統御が家庭内の、社会の、集團の、國家の、そしてひいては世界の平和に不可欠であると信じております。平和は、事物に対して徹底的な探求を行い、その正体を照らし出すことにより、そして眞の知識に基づく決意と、心からの意志を持ち、心と精神を清らかにすることにより、実現可能になります。己の肉体を統御すれば、空虚な欲望を捨てることができ、その結果、心と精神を清めることができるのです。人間の利己心にはいろいろな側面がありますが、中でも、名声や悦楽を求める世俗的な欲望が、心の平安の最大の障害物となります。自己を管理することによって利己心を捨て去り、肉体を統御しなければなりません。

自己管理とは即ち、己の身体と心を不純なものにしてきた汚れを洗い流し、己の本来の姿を取り戻すということです。そして、この克己、自己管理により、清らかな状態に到達すれば家族、集團、社会、そして世界に争いのない相

互理解が生まれ、國家間の紛争もなくなります。このようなことが起これば、世界平和の実現が現実のものとなり、地球上に天國がつくられることとなります。この天國は、政治家にとつても宗教者にとつても、理想の地となります。

両親の死後、遺産にからむ問題で子供達の間で内輪もめが起こるケースがよくあります。この種の対立の原因は、人間の利己的な欲望にあります。そして己の所属する集團のこゝろしか考えないと、どうしても論争や、争いが起こり、また各國が自國の利益しか追求しないということで、國の間の戦争が勃発します。そして宗教団体同志の争いは、各團體が己の宗教のみが正当な宗教であり、その他の全ては邪教であると考えるところから始まります。

過去の歴史の中で、宗教間の論争に端を発したような戦争がいくつもありました。このような争いの全てが己のため、己の所属する團體のため、己の國、または己の宗教のために強欲に全てを欲するということに起因しているということができるでしょう。

また一つの國の中でも、富める者と貧しき者との間の生活水準の格差が不調和感を生み出し、ある者が他の者に嫉妬心をもつことにつながっていきます。

こういったこと全ては、誰もが他人を必要としているも

のを無視して、己の必要としているもののみを手に入れたがつてゐるからこそ、そのことに原因があるのです。ですから、誰もが己の利己的な欲を捨てて、相手を理解しようとし、歩み寄れば嫉妬や争いは消え去り、調和が生まれるでしょう。そうすることによりお互いを愛し、助け、お互いを理解することが出来るようになります。

このことこそ仏陀の慈悲の心が、そして、孔子の人道が、そして、キリストの愛が説いている宗教者の精神であります。このような態度でいかなる物事にも対処できたならば、貧しき者を助け、病める者をいやし、力のない老人を慰め、不幸な者に手をさしのべることが出来るでしょう。これが宗教者の使命と私は考えています。

宗教の究極的な目的は人類の救済です。今日、ここにお集まりの皆さま方は、それぞれの宗教の教義をもつて、己の周りの人びとに利己心を捨てよ、正しき者になれと説くことに努力をする、それをする事によって、ユートピアを築くことができると私は確信しております。

世界の大国が、私利私欲の探求レースを中止して、ミサイルなどの人類を破滅に追いやる兵器の製造をやめ、現在所有している兵器を廃棄して、その結果、巨額の軍事費を人類救済のための基金とすることができたら、どんなに素

晴らしいことでしょう。これを各宗教間の協力により、実現させなければなりません。我々宗教者が団結し、この大義に心身を捧げれば世界平和が実現されると、私は信じております。

ここで、相互理解の模範を示して共通の目的を達成するために団結しなければなりません。

XI 教派神道連合会代表

黒住宗晴

黒住教教主

このたびの宗教サミット開催にあたり、ここに平和への提言の場をお与えいただきましたことを、まことに有り難く光榮に存じております。私はまずお集まりの皆様方、それぞれに信じられる神仏に心からの感謝とともに、開創千二百年を迎えられました比叡山の伝教大師の御霊に敬仰の誠を捧げるものであります。

さて、私は一人の日本の宗教者としてつくづく思うことです。国と国、人と人が平和であるためには、自分一人をよしとする心を捨てることだと思えます。一人、自国だけが優れているとしないことです。一人として完全無欠な人格、人生がないと同じように、一国として完全無欠な国もなく、また歴史の上に過ちを持たぬ国もないのではないのでしょうか。

一国の国民にとって、自国に誇りを持つことは、その国の存立のためにも重大事でありましょう。しかし、それが、自国のみ一人をよしとする慢心となるならば、それは自ら国を誤らすことになるであります。自らが自国に誇り

をもつ時、その時は同時に、他国の人々もそれぞれの自国に誇りを持っていることを忘れてはならないと思うのです。

私はかつてイスラームの友人に聞いたことですが——ちなみにイスラームの本来の意味は平和ということだそうです。——彼が言いますのに、コーランには、「あなたたちは、あなたがたたちの行き方があり、わたしたちには、わたしたちの行き方があり」とあるそうです。これはお互いの相違点を認めた上で、その存在の尊さを大切にするということだと思えます。それぞれの違いは認めつつも共通点を見出し、そこにおいて結ばれてこそ、人も国も平和でありうると信じます。

ところで、日本の神道では、拝礼の対象として、古来丸い鏡をまつてまいりました。これは、万物のいのちの源として、神の顕現としての太陽を象徴していることはいくまでもありません、が同時に、それが鏡たるゆえんは、拝礼する人自身がそこに写っているわけで、神を拝むということは、自らを拝むということでもあるわけです。このことは、人は皆、それぞれの心に神の鎮まる尊い存在であることを明示しています。そして、そこに額ずき祈る時は、内なる神の大いなる働きを得るときでもあります。

仏教では、拝礼の場に仏像をまつります。これはある仏教者から伺った話ですが、仏像の柔和な、まさに平和そのもののお顔元は、人間の理想の心の表れであるといわれます。すなわち、人みな、心の中に本来備わっている仏性の証であるということであります。そして、仏像に拝礼する祈りの時は、内なる仏心のより明らかな輝きを得る時でもあるわけです。

これはまた、あるキリスト者から教えていただいたことです。キリスト教の十字架は、キリスト受難の十字架であることはいまでもありませんが、また、その根本精神である自己犠牲と愛を表現しているといわれます。利己心を断ち切るような横軸、そして天地を貫く愛の心の縦軸。十字架はこの両者のクロスでもあるわけです。この精神は宗教のいかんを問わず、凡そ人間のあるべき平和への道を教示していると思います。

とかく自分一人をよしとしがちな己を小さくして、他の方への愛を、慈悲を、誠を尽くしていく。ここにこそ内なる神、仏性のより大いなる輝きがあるということでありましょう。それは、慈悲こそ仏であり、愛こそゴッド、誠こそ神ということであろうかと存じます。

私たち宗教者は、幸いなことに祈りの尊さを知っています。

す。しかも、私たちは、人のために祈ることをその日常の業といたしております。私たち個々の祈りは小さくとも、こうして一同に集うお互いの、日々のたゆまざる祈りは、必ずや世を清め、人の心の内なる神、仏を大きく輝かしめると信じます。そして、その日々の祈りによって、宗教者自身がより一層和やかに清らかに自らの心を養われつつ、他の方のために率先垂範して、愛を、慈悲を、誠を捧げつづける宗教者でありたいと願うものです。ここにこそ、今日の私たち宗教者に課せられた平和への使命があると確信いたします。

ところで、ちょっと妙なことを申し上げるようですが、こうして各国から集まった私たちは、地球儀も良いのですが、いろいろな国で発行された世界地図を自らの居室に掲げたいかかと思うものです。

ニュージーランドやオーストラリアで求める世界地図は、北と南がさかさまになっていて、この両国が地図の中心にあり、日本は下のほうにあります。ヨーロッパで買いためた地図では、日本はまさに極東に小さくあります。しかし、日本で一般に売られている世界地図では、日本は中央に赤くえがかれ、極東はアメリカでイギリスはいわば極西になっているわけです。こうして各国の地図を同時に持

つことは、自分一人をよしとしないためにも、意味があるのではないかと思うのです。

最後にお許しをいただいて、黒住教の教祖黒住宗忠が、鎖国の江戸時代に詠んだ歌を朗読させていただきたいと存じます。

誠ほど世に有り難きものはない

誠ひとつで四海兄弟

XII 全日本仏教会代表

阿部野竜正

全日本仏教会会長

私たち日本の仏教徒が「平和」に就いて思いを巡らす時、まず最初に思い浮かぶのは、六世紀に日本の仏教の礎を築き、千四百年を経た今日に於いてもなお、国民から深く尊敬されている聖徳太子の「和をもつて貴しとなす」という言葉であります。聖徳太子は、多くの争いを見つめて平和への願いを訴えたのでありますが、この言葉は現代に生きる私達にとつても極めて重大な意味を持っているように思われるのであります。殊に私たち宗教家にとつては、特別の響きをもつて迫ってくるように思われるのであります。

人間の歴史を省みれば、歴史を彩るのは、平和より争いや戦争であり、殊に宗教と宗教との関係は、眼をそむけるような光景や耳をふさぐような罵声に特徴づけられており、争い疲れてはじめて人びとは寛容の精神に目覚めたのであります。十八世紀後半に始まった産業化の波は大きくうねりつつ次第に地球を狭くし、一つにしてきました。我国は二百五十年におよぶ鎖国、つまり国際的な関係を断絶

した経験有しておりますが、今日の世界に於いては、こうしたことは最早、不可能であります。国家と国家の関係は、今後いよいよ緊密化してゆくであろうことは創造に難くないのであります。

こうした現状のなかで、この度、世界各地から諸宗教、諸教派の代表者の方たちが短い期間ではありますが、様々な制約を乗り越え、比叡山に集合して平和のために共に祈り、共に語ることは、世界平和にとって極めて意義ぶかいことであります。と申しますのは、国家と国家の関係の緊密化に対応して、宗教と宗教もこれからは、相互理解を深めなければならぬという声に即応するものであるからであります。顔と顔を見合わせて語るといことは、先入観や偏見から人を自由にしてくれます。このことがどれほどこれまで憎しみの対象であったかも知れなかった他の宗教の存在を認めることに役立つかは言をまたないのであります。今日このことは大変重要なことであることは言うまでもありません。そして、これは平和への第一歩であります。

ところで実は、宗教と宗教の間の平和的共存ということでは、我国は千年以上に及ぶ経験を己に有しているのであります。この経験がこの度の宗教サミットの際にも諸宗教が連帯して開催する風土を生んだのであります。そしてこ

のことは、今日の世界の状況のなかで宗教と宗教の間の平和と相互理解の問題を考える場合に一つの生きた参考となることでありましょう。

私は、宗教と宗教の間の相互理解が進めば進むほど、絶対者の名前はさまざまに呼ばれようと、呼ばれる以前の未だ言葉に定着しない人間の心と心は、互いが人間であり、人間以外の何者でもないことを認め合うかぎり、十全の交流が可能であることを疑いません。そうして宗教による平和がこの地上に実現するためには、比叡山を開かれた伝教大師が語られた「一隅を照らす」ことから、更には仏教の原点である慈悲の心を基調として地道に一步一步すすむことが肝要であることを銘記するものであります。

XIII 日本キリスト教連合会代表

白柳誠一

日本カトリック司教協議会会長

人工衛星の映し出す地球は、青と白で織りなされた平和色の球体です。誰しもがその美しさに感動し、平和に夢を馳せることでしょう。

しかし同時に全ての人は知っています。あの平和色の地球の映像には、血なま臭い戦争も、差別も抑圧も不正も一切映し出されていないことを……。

また同時に全ての人は自分の身近で聞いています。これら不当の状況下におかれている人々の悲痛なうめき声を……。

この矛盾の中に身を置く私たち地球人はどこから手をつけ、何をどのようにして行けばよいのか皆目見当がつかない程の現状に生きているといっても過言ではありません。

しかし、差別・抑圧・不正などを生み出す構造や制度を見逃すわけにはいきません。また、不遇な状況や経験にも負けずに人間としての成熟を求めて生きる努力をしている人々の、ほんのささやかな平和や愛を根こそぎ奪い去ろうとする邪悪な勢力を前に、手をこまているわけにもいきま

せん。

私ども日本におけるキリスト者は、その数においても、組織力においても非常に小さなグループではありますが、全て地球に生きる人々は兄弟姉妹であることを確信し、善意ある全ての人々とともに、真の平和を実現すべく苦業を分かち合っていくたく存じております。

正義と愛と平和の神への信仰と、それに伴う生活そのものを通して平和を作り出すお手伝いができれば幸甚に存じます。

ところで、平和をもたらしための国際的協調、あるいは制度や構造の見直しと改善の重要性もさることながら、うつかりしていると目にも耳にも入ってこない小さな小さな状況に追いやられている人、今すぐにでも救いを必要としている人の姿をみると、その呼吸をきき分けることに對しても鈍感ではありたくありません。

このようなごく当り前で、小さな関わりそのものこそ、私たちに与えられた平和への第一歩だと確信するからです。この種の関わりを通して私たちは人間のみなならず、この地球にあるすべての生命の姿と呼吸が見えてくるものとも思い、地球の平和には欠かせない努力に違いありません。この地球にしか生命が生きていることができないことを思

う時、改めて地球の重要性を感じ、親しみを覚える次第です。

人間の夢や幸せが、得てして人工的なもので占められている昨今、人間の生命そのものにまで、人工的技術が介入して参りました。人間の生死、そして生活の領域にどれほど人工的なものが支配しているのでしょうか。

このような状況から推し測りますと、人間の最も根源的な営みであり最も重要な成果である正義・愛・平和の領域にまで、人工的技術が全能なる力を伴って登場するかも知れません。その結果であるまやかしの幸福が全地球をおおうことのないよう真剣に折り、かつ尽力する覚悟を致しております。

私もキリスト者は、ここ比叡山の「平和の祈り」の場に臨み、ご参集の国内外のすべての方々と心を同じくして、平和の実現のために、地に着いた、そして着実な平和を作る人 (peacemaker) として、自分たちの生活を捧げたいと思います。

正義と愛と平和そのものであられる父である神様による照らしと導きと支えなしには何ひとつ為し得ない弱い人間であることを忘れず、自らの信仰生活に励み、それを通して得られる希望を伴侶にしつつ、いかなる苦境に立たされ

ようとも、地球の自然体である「平和」への道を作り続けていく決意を表明致します。

XIV 神社本庁代表

櫻井勝之進

神社本庁総長

本日ここに、日本の神社神道を代表しまして、世界平和への提言をいたす機会を得ましたことは、誠に光榮の至りと存じております。

ご承知のように日本には数多くの宗教宗派が共存しております。長い歴史のうちには、それらの間に若干の争いもなかったとはいえません。

しかし、時代の経過と共に、それぞれが互いの役割を自覚し、相互の立場を尊重し合つて、日本の文化と国民の平和な生活の形成に貢献してまいりました。

このたび、千二百年の伝統に輝く聖地比叡山において、世界の諸宗教を代表される多数の宗教者が、平和の祈りを捧げるといふ共通の目的をもつてお集まり頂きましたことは、今世紀における慶事と申すべきであります。異なつた宗教宗派の代表者たちが、一同に会して語り合うという、このこと自体が、全世界の人々に対する、なによりも雄弁な平和へのメッセージではないでしょうか。

かつて私たちは、互いの宗教を理解しようとする努力を

怠つてきました。このことは、諸宗教の共存と世界の平和にとつて、決して好ましいことであつたとは申せません。私たちは今こそ、相互に世界の諸宗教のそれぞれの価値を理解し、尊重し合うことが緊要かと存じます。

神社神道には「みこともち」という教えがあります。これは、カミから与えられた各自の役割を自覚し、その役割の遂行に挺身せよとの教えであります。これは同時に、他者の「みこともち」を認めることを教えております。

私たちは、諸宗教がそれぞれの社会において受持つている役割を互いに理解し、尊敬することが肝要であらうかと存じます。

其処にこそ、世界の平和は芽生え育っていくものと、私は確信しております。

XV

新日本宗教団体連合会代表

宮本丈靖

新日本宗教団体連合会副理事長

昨年十月のアッシジにつづく歴史的な祈りの場において、新宗連を代表して平和に対する提言の機会を与えられたことに深く感謝いたします。とくに、ヒロシマ、ナガサキに原爆が投下された日を目前に、海外から各教各宗派のご参加を得て、ここ比叡山で厚い心結び合い平和祈願の集いをもつことができましたことは、ひとえに神仏のおほからいであると信じます。

新宗連は一九五一年結成以来、「信教の自由」「政教分離」「国民皆信仰」と共に「宗教協力」を重要なスローガンの一つにかかげて運動を展開してまいりました。はからずも一九六五年ローマ教皇パウロ六世の提唱による教会一致運動が契機となり世界に宗教協調の潮流が生まれ、今や大きなうねりとなりつつあるといえましょう。その意味で今回の宗教サミットは新宗連にとって、価値ある大きな実りであるとは高く評価するものでございます。

いま世界を支配している危険と不安は、いうまでもなく核の力への信奉と、核軍拡の過熱、そして強烈な軍事対決

色の悪循環であります。一九七〇年代、米・ソのデタント時代でさえ軍事力の増強は国策の最優先とされてきました。

本年二月にはソ連が一年半ぶりに核実験を再開し、国際政治にまたもや同様な影響を及ぼしました。一九四五年以来の核実験総数は八六年までに米・ソを中心に千五百八十八回に達していると聞き及んでおります。

百パーセント不正である戦争の準備のために、なぜこのように脅迫的政策を重ねて行かなければならないのでしょうか。核戦力の支持者たちは、軍事力の均衡こそ平和の保障という危険思想にとらわれております。限定核戦争に勝利して生き残るというもくろみに溺れております。

これは明らかに幻想にすぎません。現実の核兵器の保有量を思えば、核戦略であれ、核戦術であれ、ひとたび核のボタンが押されれば、反射的にすべてのボタンが押され、地球は生態系まで壊滅し、終末を迎えることとなります。恐るべきことは核兵器が、すでにあたりまえの兵器になりつつあるということ、さらにまた、それが第三世界の紛争に核行使の脅威をひんばんに与えている事実であります。

一九八二年、国連軍縮総会にあたって、新宗連は「核兵器廃絶・世界の軍縮」を呼び掛ける運動を展開し、三千七

百三十三万余の署名を集めました。三カ月間という短い期間に日本人の三分の一近い支持を得たのであります。これはまことに『声なき声』の結集であり、いかに多くの人々が戦争を拒否し、核兵器を嫌悪しているかを物語っております。

私たちは今こそ、戦争は満ち足りない欲望であることを知らなければなりません。平和が世界人類の悲願でありながら、未だ戦火が止まないことに、私も宗教者は心の痛みと共に、大いなる責任をも感ぜずにはいられません。まず平和を阻害するもう一つの要因を探索し、効果的な取り組みを強化することから始めなければなりません。

宗我を超え、道徳的、精神的な力の結集をはかり、理解と公平、博愛と正義、そして、平和を信じる大きな勢力を築きましょう。そのためには、いつくしみの心、思いやり、あきらめない勇氣、寛容と不屈の努力が必要です。英知と行動をもって不信から友好、対決から対話へ、世界の良心に訴えつづけねばなりません。私も宗教者こそが自発的平和運動の中心となって、軍備拡張の狂気に立ちほだかることを確認しましょう。

このたびの強固な結び合いを力に、平和の祈りを世界に広げ、高めるために、信仰者の確信と神仏への敬虔な心を

もって、さらなる前進を誓い合うことを望み、私の提言といたします。

「世界宗教者平和の祈り」次第

〈来賓・代表団・役員入場〉一五・一〇

来賓並びに代表団、役員の諸先生方の入場。

〈祈りの代表入場〉一五・二〇

「比叡山宗教サミット」世界宗教者平和の祈りの集い——海外・国内代表者の入場。この式典では、海外から、仏教、キリスト教、イスラーム教、ユダヤ教、ヒンドゥー教、シーク教、儒教、そして諸宗教組織の代表として、WCRP、TOU（理解の殿堂）、アッシジの代表が祈りを捧げた。

国内からは、日本宗教連盟参加の教派神道連合会、全日本仏教会、日本キリスト教連合会、神社本庁、新日本宗教団体連合会のそれぞれから代表者が祈りを捧げた。

〈開式の辞〉一五・二八

開式の辞は、本会議議長団の一人である櫻井勝之進神社本庁総長によって行なわれた。

〈平和の鐘〉一五・三〇

比叡山の大梵鐘が打ち鳴らされると同時に、国内では、日本宗教連盟協賛の五団体をはじめ、多くの宗教法人にも呼びかけがなされており、海外でも、バチカン、アッシジ

をはじめ、イギリスのカンタベリー大寺院、またアジアでは、世界（アジア）宗教者平和会議加盟のバングラディシュ、スリランカ、タイなど、国内外の多くの宗教団体において、梵鐘や教会の鐘、太鼓などが打ち鳴らされ、世界平和への祈願が行なわれた。

〈世界宗教者平和の祈り〉一五・三三

① 仏教代表。海外の仏教を代表して、中国から、中国仏教協会会長・趙樸初氏、天台山国清寺住持・唯覚法師、五台山仏教協会副会長・慈貫法師、ハワイから、世界仏教徒連盟副会長・スナオ・ミヤハラ氏、スリランカ上座仏教・スダス・ウナセカナ氏が登壇し、祈りを捧げた。導師は唯覚法師。

② キリスト教代表。カトリックから、バチカン諸宗教省長官・フランシス・アリンゼ枢機卿、尻枝正行バチカン諸宗教省次官、トーマス・ミッシェル司祭。プロテスタントから、韓国の改革派教会世界連盟副総裁・チュング・ヒュン・ロ師、世界YMCA同盟総主事・スー・ミン・リー氏。聖公会から、カンタベリー大主教特使・ディビッド・ヤング他宗教顧問議長、オーストラリア大主教特使・ハートル・ジョン・ルイス北部クイーンランド大主教、米国聖公

会大主教特使・ウィリアム・ホルウェル中央フロリダ主教。オースドックスから、ソ連のロシア正教大主教特使・メトロポリタン・マカリー・イバノフランコフスク・コロミイスク大主教、インドの世界教会協議会議長・パウロス・マル・グレゴリオス師。

デイビッド・ヤング特使とメトロポリタン・マカリー特使が「祈りの言葉」を捧げた。

③イスラーム代表。エジプトのシェイク・アズハル特使・モハメッド・ホセム・エルディン・アズハル事務総局長、サウジアラビアの世界ムスリム連盟代表・ムサ・ムハメット・オマル・アブドゥル・アジズ大学教授、マレーシアのM・A・ラウーフ国際イスラーム大学総長、トルコのイスラーム文化研究所所長・エクメレディン・イヘサンオグル氏、ソ連の中央アジア・イスラーム委員会議長・シャムスディン・カーン・ババハーノフ氏、神戸モスク・イマム・ヤヒヤ・ムニール氏が登壇し、イマム・ヤヒヤ・ムニール氏とモハメッド・ホセム・エルディン氏が、「平和の祈り」を捧げた。

④ユダヤ教代表。アメリカのアメリカラビ中央会議副議長・ヨセフ・B・グレーサー氏、ベネズエラのビンチャス・ブレーナー・ベネズエラ首席ラビ。「祈りの言葉」は、ビン

チャス・ブレーナー氏によって述べられた。

⑤ヒンドゥー教代表。インドのヒンドゥー教連盟総裁・カラム・シン氏による「平和の祈り」。

⑥シーク教代表。インドのユニバーサルテンブル代表・スージャン・シン・ウーバン氏による「平和の祈り」。

⑦儒教代表。韓国の成均館儒教本部長老・李炳主師による「平和の祈り」。

⑧諸宗教組織代表。アメリカのTOU（理解の殿堂）会長・ジェイムズ・パークス・モートン・ニューヨーク聖ヨハネ大聖堂長、スイスのWCRP国際事務総長・ジョン・B・ティラー氏。司式はJ・P・モートン師。

⑨アッシジ代表。イタリアのフランシスコ修道会教会一致事務局長・マクシミリアン・ミッチー師、聖フランシスコ教会・レオ・柳本繁春神父による「平和の祈り」。

⑩教派神道連合会代表。品田聖平・神道大教管長、福光佐郎・黒住教大教殿司教、大桃吉雄・御嶽教八海山教会長、巫部建彦・神理教管長、出口京太郎・大本教主補補佐。品田神道大教管長の先達による「祈りの祝詞」の奉上。

⑪全日本仏教会代表。小峰順督・全日本仏教会副会長、来馬規雄・曹洞宗総務部長、川井匡俊・浄土宗財務局長、加藤海晃・日蓮宗宗務副総長、横山尚空・臨済宗妙心寺派

総務部長、佐藤智仙・総本山長谷寺事務総長代理、高野一能・真言宗智山派宗務総長。小峰全日本仏教会副会長の導師による「平和の祈り」。

⑫日本キリスト教連合会代表。亀谷莊司・日本キリスト教連合会委員長、木川田一郎・日本聖公会首座主教、田中健一・カトリック京都司教、三末篤實・カトリック広島司教、八木成之・日本聖公会京都教区主教。亀谷日本キリスト教連合会委員長の司祭による「平和の祈り」。

⑬神社本庁代表。田中弘清・石清水八幡宮宮司、木下龍美・平安神宮権禰宜、生嶋暢・大將軍八神社禰宜、小栗栖元徳・御霊神社宮司、中田三貴勇・伏見神宝神社宮司。田中石清水八幡宮宮司による祝詞の奉上。

⑭新日本宗教団体連合会代表。佐原慶治・妙道会教団会長、鉢呂福太郎・天恩教教主、飯島正三・思親会会長、深田充啓・円応教教主、力久隆積・善隣会教主。飯島正三思親会会長による「祈りの言葉」の奉読。

〈平和の黙禱〉一六・五〇

佐原慶治妙道会教団会長の発声によって、参加者全員起立して、一分間の黙禱。

〈比叡山メッセージ披露〉一六・五一

議長団の広瀬静水・日本宗教連盟理事長による「比叡山メッセージ」の披露。

〈平和のあいさつ〉一六・五四

日本聖公会・関本肇司祭による「平和のあいさつ」。

「長い時間、厳粛な時間でありましたけれども、今、私たち自身の時間になりました。今から平和を作り出すあいさつを心からいたしたいと思います。」

どうぞ、皆様、お立ちになってお互いが、いろいろの思いをもつて平和のあいさつをしてください。どのような平和を今、心に念じているか、それぞれの思いを口に出してください。ピース、ピース。

皆様、どうぞお立ちになって、平和のあいさつをしてください。宗教サミット・メッセージにあったことを繰り返しながら、核兵器の廃絶、あらゆる軍備に反対し、そして、あらゆる差別に反対して、平和のあいさつをします。あるいは、世界の中の貧しい人たち、今悲しんでいる人たちのことを思つて、平和のあいさつをしてください。

〈記念品授与〉一七・〇〇

カトリックの十二歳から十六歳の神の愛に基づく精神運動団体である「フォコラーレ」の少年少女たちに、比叡山宗教サミットの成功を祈念する署名収集のお礼として、名誉議長である山田恵諦・天台座主から記念品が授与された。

〈閉式の辞〉一七・〇一

山田恵諦名誉議長による閉式の辞。

「本日、この比叡山に世界の代表的宗教者および日本の宗教者が一堂に会しまして、昼食一食を捧げて神や仏に感謝し、心から平和のために祈ることができましたことの意味は計り知れないものであります。

一方、私共宗教者は、今まで戦争に協力をしたとか、無力であったとか、厳しい批判を受けてきた事実にも、今、謙虚に耳を傾けなければなりません。

しかし、今日の平和の祈りは宗教を超えて、現在惹起している世界のいろいろな問題に対して連帯して立ち向かう、一つの印として受け止めたいと存じます。

もちろん、折ただけで平和が訪れるとは考えておりませんが、今まで相互理解に関心が薄かった宗教者が、宗教の原点である「折り」を通じて、協力への第一歩を踏み出したことは評価されてもよいのではないのでしょうか。

と申しましても、この比叡山宗教サミットが成功したか否かについての結論は、これからの我々の行動にかかっていることを忘れてはならないと思います。それ故に、本日発表されました「比叡山メッセージ」の精神を世界の人びとに訴え続けようではありませんか。

最後に、比叡山宗教サミット・世界宗教者平和の祈りが、魔事なく終わることができましたのは、はるばる海外から参加くださいました皆様と日本の宗教代表者、さらには比叡山宗教サミットのために献身的な奉仕活動をしてくださいました若い人びと、並びに報道陣のお蔭であると心から感謝申しあげます。

また、アッシジから比叡山、そして第三、第四の各地に、平和が実現するまで、この宗教者の平和の祈りが伝え継がれますことを祈念しまして、御礼のごあいさつと致します。誠にありがとうございます」

〈折りの代表者退場〉一七・〇五

海外・国内の折りの代表者退場。来賓・代表団・役員退場。終了。

司会 出口真人 教派神道連合会幹事・大本教団

資料

開催までの経過

日本宗教連盟協賛の5団体（教派神道連合会、全日本仏教会、キリスト教連合会、神社本庁、新日本宗教団体連合会）並びに世界宗教者平和会議日本委員会、世界連邦日本宗教委員会の実務者により（仮称）「比叡山宗教サミット準備委員会」が結成され、下記の通り6回の打ち合わせ会を開催し、名称、主催団体、日程、規模、関係団体の協力要請の方法について検討、一方その間、会場提供を申し出た比叡山延暦寺（天台宗）より上記7団体に趣旨説明と協力依頼が行なわれた。

第1回準備委員会	4月30日	比叡山延暦寺
第2回準備委員会	5月29日	京都妙法院門跡
第3回準備委員会	6月10日	上野寛永寺弁天堂
第4回準備委員会	7月2日	京都妙法院門跡
第5回準備委員会	7月30日	東京明治記念館
第6回準備委員会	8月23日	立正佼成会法輪閣

続いて昭和61年8月29日午後3時より比叡山延暦寺会館において、比叡山宗教サミットの主催団体としての日本宗教代表者会議の設立委員会並びに発会式が行なわれ、下記の事項が決定された。

1. 日本宗教代表者会議の組織及び役員
2. 比叡山宗教サミット日程
3. 比叡山宗教サミット予算
4. 比叡山宗教サミット招請宗教

その後、下記のごとく準備のための会議が開催された。

第1回常任委員会	（設立委員会）	
	昭和61年8月29日	延暦寺
第2回常任委員会	昭和61年11月13日	新都ホテル
第3回常任委員会	昭和62年4月16日	宝ヶ池プリンスホテル
第1回運営委員会	昭和61年8月29日	延暦寺
第2回運営委員会	昭和61年9月26日	妙法院門跡
第3回運営委員会	昭和61年11月13日	新都ホテル
第4回運営委員会	昭和61年12月15日	三千院門跡

第5回運営委員会	昭和62年1月24日	増上寺
第6回運営委員会	昭和62年2月19日	妙法院門跡
第7回運営委員会	昭和62年3月23日	延暦寺
第8回運営委員会	昭和62年4月16日	宝ヶ池プリンスホテル
第9回運営委員会	昭和62年6月15日	妙法院門跡
第10回運営委員会	昭和62年7月21日	延暦寺

第1回比叡山メッセージ起草委員会	昭和62年5月24日
第2回比叡山メッセージ起草委員会	昭和62年6月15日
第3回比叡山メッセージ起草委員会	昭和62年6月29日
第4回比叡山メッセージ起草委員会	昭和62年8月3日

外国諸宗教に比叡山宗教サミットの趣旨を徹底させるため下記のごとく使節団を派遣した。

第一次使節団（団長広瀬静水）

日 時 昭和62年3月28日～4月8日

訪問国 エジプト、イスラエル、トルコ

第二次使節団（団長山口円道）

日 時 昭和62年4月20日～4月28日

訪問国 バチカン、スイス、イギリス

親善使節団（団長半田孝淳）

日 時 昭和62年6月20日～6月30日

訪問国 バチカン、イタリア、フランス、イギリス

日本宗教代表者会議規約

一、本会議は日本宗教代表者会議（JAPAN CONFERENCE OF RELIGIOUS REPRESENTATIVES）＝ J. C. R. R. と称し事務局を比叡山延暦寺内におき東京事務所を東京都内におく。

二、本会議は比叡山宗教サミットの主催団体として設置する。

三、本会議は日本宗教連盟協賛の五団体の協力をえて前条の目的に賛同する代表的宗教者をもって構成する。

四、本会議の運営をはかるため次の役員を置く。

1. 名誉議長	一名	名誉顧問	五名
顧問	若干名	相談役	若干名
参与	若干名	議長団	六名
常任委員	若干名	事務総長	一名
運営委員	若干名	事務局長	一名
監事	三名		

2.

イ、名誉議長・名誉顧問は本会議を代表する。

ロ、顧問、相談役並びに参加は本会議の運営に助言を行なう。

ハ、議長団は比叡山宗教サミットの会議を運営すると共に常任委員会に出席し助言を行なう。

ニ、常任委員は常任委員会を組織し本会議の業務を議決する。

ホ、事務総長は本会議の事務を統理する。

ヘ、運営委員は運営委員会を組織し、常任委員会に提案する事項の立案及び議決された事項の執行にあたる。

ト、事務局長は本会議の事務を推進する。

チ、監事は本会議の事務並びに会計を監査する。

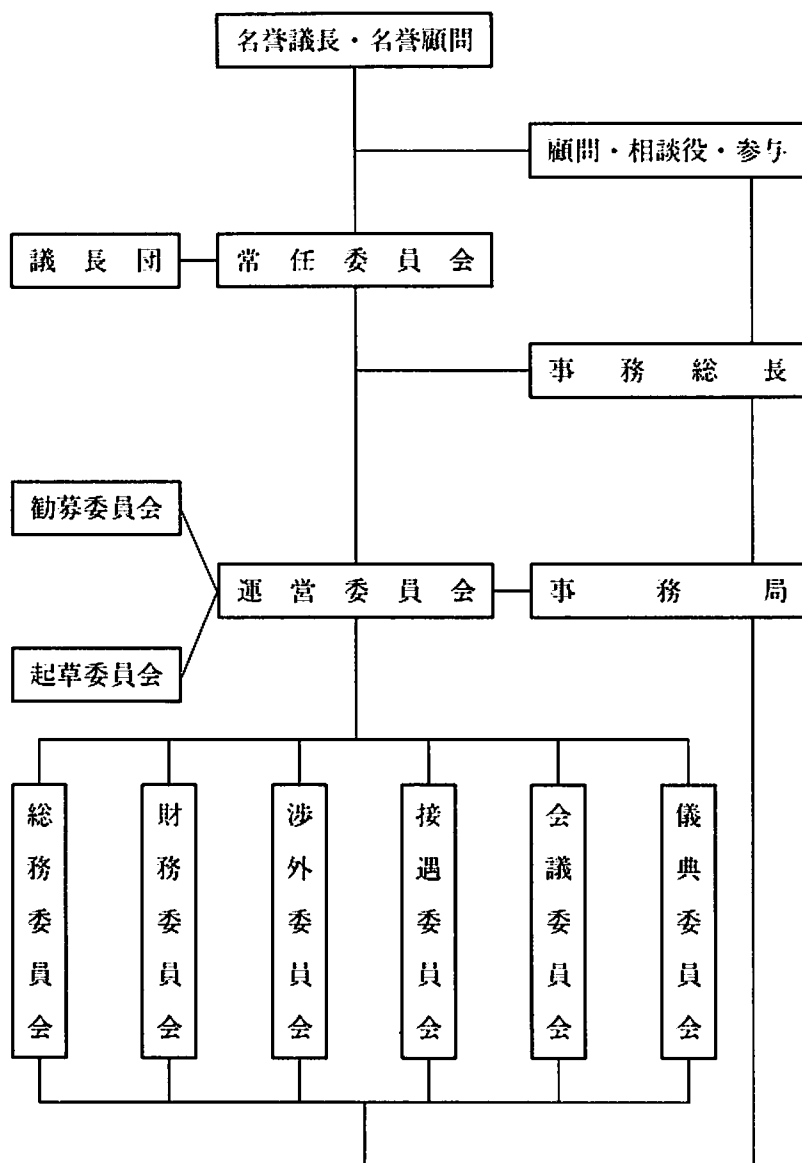
五、本会議は必要に応じて各種委員会並びに事務局に担当部を置くことができる。

六、本会議の経費は寄付金その他をもって充当する。

七、その他必要な事項は常任委員会の議決を経て定めることができる。

八、この規則は昭和六十一年八月二十九日より施行する。

日本宗教代表者会議組織図



比叡山宗教サミット
日本宗教代表者会議役員名簿

敬称略50音順

【名誉議長】

氏名	役職名	住所	
山田 恵謙	天台座主	滋賀県大津市坂本町	比叡山延暦寺

【名誉顧問】

氏名	役職名	住所	
阿部野竜正	全日本仏教会会長	和歌山県伊都郡高野町字高野山	高野山真言宗宗務庁
里脇浅次郎	カトリック枢機卿	長崎県長崎市南山手町 5-3	カトリック長崎大司教
出口 直日	教派神道連合会代表	京都府亀岡市荒塚町内丸 1	大本教団
徳川 宗敬	神社本庁統理	東京都渋谷区代々木 1-1-2	神社本庁
庭野 日敬	新日本宗教団体連合会理事長	東京都杉並区和田 2 丁目 11-1	立正佼成会会長

【顧問】

氏名	役職名	住所	
阿部 信	賀茂別当神社宮司	京都府京都市北区上賀茂本山339	
飯島 正三	思親会会長	神奈川県伊勢原市子易 1459	思親会
梅田 信隆	曹洞宗管長	東京都港区芝2丁目 5-2	曹洞宗宗務庁
大谷 光真	浄土真宗本願寺派門主	京都府京都市下京区堀川通 花屋町下本願寺門前町	浄土真宗本願寺派宗務庁
大谷 光錫	真宗大谷派門首	京都府京都市下京区烏丸通 七条上ル常葉町 754	真宗大谷派宗務所
岡田 恵珠	宗教真光教え主	岐阜県高山市山田町 1517 番地8	宗教真光
勝又 俊教	真言宗豊山派管長	東京都文京区大塚5丁目 40-8	真言宗豊山派宗務所
金子 日威	日蓮宗管長	東京都大田区池上 1-1-1	大本山池上本門寺賢主
巫部 建彦	神理教管長	福岡県北九州市小倉南区 徳力 357	
木川田一郎	日本聖公会首座主教	東京都渋谷区東 1 丁目 4-21	日本聖公会管区事務所
北島 英孝	出雲教団道	島根県簸川郡大社町杵築東 194	
倉内 松堂	臨済宗妙心寺派管長	京都府京都市右京区花園 妙心寺町 64	大本山妙心寺
黒住 宗晴	黒住教教主	岡山県岡山市尾上神道山 2770	黒住教
小峰 順普	真言宗智山派管長	京都府京都市東山区堀小路 大和路東入瓦町 964	智山派宗務庁
坂田 安儀	禩教管長	東京都世田谷区瀬田 4-19-4	
伏川 宗玄	華嚴宗管長	奈良県奈良市雑司町 406	東大寺
櫻井勝之進	多賀大社宮司	滋賀県犬上郡多賀町多賀	神社本庁副総長
品田 聖平	神道大教管長	東京都港区西麻布 4 丁目 9-2	神道大教院
篠田 康雄	熱田神宮名誉宮司	愛知県名古屋市中熱田区神宮 1-1-1	神社本庁常任顧問
柴田 道守	実行教道主	埼玉県大宮市盆栽町 377	

白柳 誠一	カトリック東京大司教	東京都文京区関口3丁目16-15	
千家 尊祀	出雲大社宮司	島根県簸川郡大社町	島根県神社庁庁長
千家 達彦	出雲大社教管長	島根県簸川郡大社町宮内	出雲大社教教務本庁
曾宮 康之	御嶽教管長	奈良県奈良市二名町大淵3775	
高澤信一郎	明治神宮宮司	東京都渋谷区代々木神園町1-1	
田中 文清	石清水八幡宮名譽宮司	京都府八幡市八幡高坊30	
中村 康隆	増上寺法主	東京都港区芝公園4-7-35	
新田 邦夫	神道修成派管長	東京都杉並区松庵3丁目15-12	
丹羽 廉芳	永平寺貫首	福井県吉田郡永平寺町	
幡掛 正浩	神宮少宮司	三重県伊勢市宇治館町1	
堀井 康順	妙法院門跡門主	京都府京都市東山区 妙法院前側町447	
藤井 實應	浄土門主	京都府京都市東山区新橋通 大和路東入3丁目林下町400	浄土宗事務庁
三宅 歳雄	WCRP 国際委員会 委員長	大阪府大阪市大正区 三軒家西3-8-21	金光教東尾教会
宮本 丈靖	新日本宗教団体連合 会副理事長	東京都渋谷区代々木3丁目3-3	妙智會教団
吉岡大十郎	祖神道教団会長	石川県金沢市水溜町22	祖神道教団

【相談役】

氏名	役職名	住所	
稲田 稔界	日本宗教連盟顧問	東京都江東区三好1-7	正覚院
齊藤 積平	日本イスラム団体協 議会コーディネーター	東京都国立市中2-22-34	
山本 杉	全日本仏教婦人連盟 理事長	東京都東久留米市南沢1-14-38	

【参与】

氏名	役職名	住所	
赤田 日崇	法華宗本門流管長	京都府京都市中京区寺町御池	大本山本能寺
味岡 良戒	真言宗大覚寺派管長	京都府京都市右京区嵯峨大沢町4	大本山大覚寺
遠北 明彦	和歌山県護国神社宮司	和歌山県和歌山市和歌浦中3-4-26	和歌山神社庁参事
麻生 文雄	真言宗醍醐派管長	京都府京都市伏見区醍醐 東大路町22	真言宗醍醐派事務庁
養父 守	宗像大社宮司	福岡県宗像郡玄海町田島	
阿蘇 惟之	阿蘇神社宮司	熊本県阿蘇郡一の宮町宮地2505	熊本県神社庁庁長
足立 信治	神津神社宮司	大阪府大阪市淀川区 十三東2-6-39	
新井三知夫	救世真教会長	群馬県群馬郡箕郷町中野292	救世真教
飯尾 精	赤穂大石神社宮司	兵庫県赤穂市上飯屋旧城内	
池田 登輝	中山寺管長	兵庫県宝塚市中山寺2-11-1	

石上 智康	浄土真宗君津光明寺住職	千葉県君津市大和田 5-6-2	君津光明寺
石倉 恒男	大慧会教団副会長	大阪府堺市大美野 142-14	
磯貝 洋一	志波彦神社・監電神社宮司	宮城県塩釜市一森山 1-1	
一条 智光	善光寺大本願貫首	長野県長野市元善町	
伊藤 隆夫	バプテスト広島教会牧師	広島県広島市中区舟入町 12-7	
巖谷 勝業	祐天寺住職	東京都目黒区中目黒 5-24-53	
上杉 千郷	諏訪神社宮司	長崎県長崎市上西山町 3	
梅山 円了	毘沙門堂門跡門主	京都府京都市山科区 安朱稲荷山町 18	
飯南 寛範	比叡山延暦寺副執行	滋賀県大津市坂本本町 4220	比叡山延暦寺
大角 光徹	比叡山延暦寺副執行	滋賀県大津市坂本本町 4220	比叡山延暦寺
奥田 行朗	黄蘗宗管長	京都府宇治市五ヶ庄三番割 34	黄蘗宗宗務庁
大爺 恒夫	吉田神社宮司	京都府京都市左京区 吉田神楽岡町 30	
大野 可圓	聖徳宗管長	奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺 878	総本山法隆寺
吉田 日康	顕本法華宗管長	京都府京都市左京区 岩倉幡枝町91	顕本法華宗宗務庁
岡田 善夫	八幡神社宮司	兵庫県西宮市中須佐町 4-12	兵庫県神社庁副庁長
岡野 正貫	孝道教団統理	神奈川県横浜市神奈川区鳥越38	孝道教団本仏殿
岡野 武徳	解脱会理事長	東京都新宿区荒木町 4	解脱会
小倉 眞現	念法真教灯主	大阪府大阪市鶴見区緑 3-4-22	念法真教教団
花山院親忠	春日大社宮司	奈良県奈良市春日野町 160	
片桐 勤	北野天満宮宮司	京都府京都市上京区馬喰町	京都府神社庁副庁長
加藤 隆久	生田神社宮司	兵庫県神戸市中央区下山手通1-2-1	
樺山 資英	御霊神社	滋賀県大津市鳥居川町 14-13	滋賀県神社庁参事
樫田 瑞元	西山浄土宗印空寺住職	京都府京都市右京区山越西町 8	
河井 昭子	全日本尼僧法团事務局長	東京都新宿区大京町 31	慈母会館
川端 善雄	○の家会長	三重県員弁郡藤原町長尾字門原	○の家
喜田川清香	二荒山神社宮司	栃木県日光市山内 2307	
北川 教全	全日本尼僧法团理事長	東京都新宿区新宿 6-15-2	西光庵
北角 圓澄	天台宗参務	滋賀県大津市坂本本町 1771-1	天台宗務庁
北山 宏明	教念寺住職	静岡県焼津市小川 349	
岸 千年	06日本聖書協会理事長	東京都中央区銀座 4-5-1	日本聖書協会
木村 勝茂	京都霊山護国神社宮司	京都府京都市東山区清閑寺 霊山町1	
清原 恵光	比叡山延暦寺副執行	滋賀県大津市坂本本町 4220	比叡山延暦寺
拉田 宏祥	天台宗宗務所長会会長	岡山県鞆方郡鞆方町六条院西890	円珠院
久我 巖雄	浄土宗西山禪林寺派管長	京都府京都市左京区永観堂町48	浄土宗西山禪林寺派 宗務庁
九鬼 宗隆	熊野本宮大社宮司	和歌山県東牟婁郡本宮町本宮	和歌山県神社庁庁長
米馬 規雄	高岩寺住職	東京都豊島区巢鴨 3-35-2	
桑原 英昭	広島県宗教連盟理事長	広島県広島市西区高須 1-8-26	

小池 義人	真言宗須磨寺派管長	兵庫県神戸市須磨区 須磨寺町4丁目6-8	真言宗須磨寺派宗務所
古宇田 亮宣	善光寺大勧進	長野県長野市元善町492	信州善光寺
小嶋 覚禅	比叡山延暦寺副執行	滋賀県大津市坂本町4220	比叡山延暦寺
琴陵 光重	金刀比羅宮宮司	香川県仲多度郡琴平町892	香川県神社庁庁長
小松 道圓	真言宗泉涌寺派管長	京都府京都市東山区泉涌寺 山内町27	真言宗泉涌寺派宗務所
小松 智光	寂光院住職	京都府京都市左京区大原草生町676	
小林 隆仁	真言宗御室派管長	京都府京都市右京区御室大内33	真言宗御室派宗務所
坂本 光聡	真言三寶宗管長	兵庫県宝塚市米谷字清シ1	大本山清澄寺
佐々木 徒好	今宮神社宮司	京都府京都市北区紫野今宮町21	京都府神社参事
櫻井 正弥	速谷神社宮司	広島県佐伯郡廿日市町上平良	広島県神社庁庁長
桜間 観利	浄土宗西山深草派管長	京都府京都市中京区 新京極通三条下ル桜之町451	浄土宗誓願寺派宗務所
佐久間 兼八	白光真宏会顧問	千葉県市川市中国分5-26-27	白光真宏会
猿渡 盛文	大國魂神社宮司	東京都府中市宮町3-1-2	東京都神社庁庁長
澤渡 盛房	富岡八幡宮権宮司	東京都江東区富岡1-20-3	
三條 實春	平安神宮宮司	京都府京都市左京区岡崎西天王町	
色井 秀讓	天台真盛宗管長	滋賀県大津市坂本町	天台真盛宗宗務所
筋谷 行謙	天台宗宗機顧問	群馬県桐生市東久方町1-1-36	大蔵院
柴田 昌源	天台宗宗機顧問会会長	栃木県日光市山内2300	日光輪王寺門跡
渋谷 有教	真宗仏光寺派門主	京都府京都市下京区高倉通 仏光寺下ル新開町397	真宗仏光寺派宗務所
島田 久愛	神明神社	和歌山県和歌山市堀西2-4-48	和歌山県神社庁副庁長
清水 豪映	天台宗宗議会議長	鳥取県大山町大山9	大山寺住職
白井 永二	鶴岡八幡宮宮司	神奈川県鎌倉市雪ノ下2-1-31	神奈川県神社庁庁長
白幡 恵佑	光明寺住職	神奈川県横浜市中区灰台66	
朱雀 達城	本願寺派広島別院輪番	広島県広島市中区寺町1-119	本願寺派広島別院
鈴木 義一	賀茂御祖神社宮司	京都府京都市左京区下鴨泉川町59	
鈴木 啓月	大本元教管長	長野県諏訪市湖南6396	大本元教
鈴木 常俊	天台宗宗議会議長	栃木県日光市山内2370	実教院住職
鈴木 鳳永	信貴山真言宗管長	奈良県生駒郡平群町 大字信貴山2280-1	信貴山真言宗宗務所
杉原 直	九頭神社宮司	和歌山県那賀郡粉河町 荒見296-4	和歌山県神社庁副庁長
関 尚道	新義真言宗総本山根来寺座主	東京都文京区湯島4-6-12 湯島ハイタウンB-1211	新義真言宗宗務所
関 牧翁	臨済宗天竜寺派管長	京都府京都市右京区 嵯峨天竜寺芒ノ馬場68	臨済宗天竜寺派宗務所
関本 肇	聖公会司祭	沖縄県那覇市三原2-23-1	聖ペテロ聖パウロ教会
高橋 隆天	川崎大師平間寺貫首	神奈川県川崎市川崎区大師町4-48	大本山平間寺
瀧沢 不二郎	天満天神社宮司	滋賀県彦根市清満町1502	滋賀県神社庁副庁長

高木 亮孝	天台宗宗機顧問	和歌山県東牟婁郡那智勝浦町 那智山 8	那智山青岸渡寺
高田 好胤	薬師寺貫主	奈良県奈良市西ノ京町 457	大本山薬師寺
高松 義寛	天台宗参務	滋賀県大津市坂本町 1771-1	天台宗務庁
竹田 益州	臨済宗建仁寺派管長	京都府京都市東山区大和大路通 四条下ル 4 丁目小松町 584	臨済宗建仁寺派宗務所
武浪 嗣一	日吉大社宮司	滋賀県大津市坂本町 4213	
田代 尚光	融通念仏宗管長	大阪府大阪市平野町 平野上町 1-7-26	大念仏寺
田島 瞳	春日神社宮司	大阪府泉佐野市春日町 4-12	大阪府神社庁副庁長
多田 厚隆	中尊寺貫主	岩手県西磐井郡平泉町平泉 字衣関 202	
田中 徳光	神霊の家代表役員	大阪府大阪市住吉区 帝塚山東 2-5-2	神霊の家
田中 弘清	石清水八幡宮宮司	京都府八幡市八幡高坊 30	
田中 法光	真生会会長	岐阜県岐阜市西野町 3-19	真生会
田辺 哲崖	曹洞宗参議	京都府京都市中京区堺町通 竹屋町下ル	
津江 孝夫	今宮戎神社宮司	大阪府大阪市浪速区 恵美須西 1-6-10	大阪府神社庁副庁長
筑波 常通	真言宗山階派管長	京都府京都市山科区 勧修寺仁王堂町 27-1	真言宗山階派宗務所
坪原喜三郎	伏見稲荷大社宮司	京都府京都市伏見区 深草藪ノ内町 68	
鶴見 照碩	新勝寺貫首	千葉県成田市成田 1	成田山新勝寺
出居 茂	修養団捧誠会副総裁	東京都豊島区池袋本町 3-11-1	修養団捧誠会
寺井 種茂	大阪天満宮宮司	大阪府大阪市天神橋 2-1-8	大阪天満宮
寺坂 義照	西山浄土宗管長	京都府長岡京市粟生西条の内 26 番地の 1	西山浄土宗宗務庁
寺沼 琢明	時宗法主	神奈川県藤沢市西富 1 丁目 8-1	時宗宗務庁
常盤井井祺	真宗高田派法主	三重県津市一身田町 2819	真宗高田派宗務庁
東條 仁進	真言宗大鳴派管長	大阪府泉佐野市大木 8	真言宗大鳴派宗務所
中 由雄	穴師坐兵主神社宮司	奈良県桜井市穴師 493	奈良県神社庁副庁長
中小路宗隆	長岡天満宮宮司	京都府長岡京市開田天神山 50	
永井 日揮	本門法華宗管長	京都府京都市上京区寺ノ内通 大宮東入妙蓮寺前町 875	本門法華宗宗務院
長瀬 貫公	日蓮宗宗務総長	東京都大田区池上 1-32-15	日蓮宗宗務院
中野 尹亮	北海道神宮宮司	北海道札幌市中央区宮ヶ丘 474	北海道神社庁庁長
中西 守	松尾大社宮司	京都府京都市西京区嵐山宮町 3	
西口 公教	真言宗国分寺派管長	大阪府大阪市大淀区国分寺 1-6-18	真言宗国分寺派宗務所
西辻 芳正	御井神社宮司	奈良県宇陀郡榛原町桧枕	奈良県神社庁参事

西村 日地	本門仏立宗講有	京都府京都市上京区御前通 一条上ル東堅町 110	本門仏立宗宗務院
西本 泰	住吉大社宮司	大阪府大阪市住吉区住吉2-9-89	
野口 日勝	法華宗陣門流管長	東京都豊島区巢鴨5丁目 35-6	法華宗陣門流宗務院
野坂 元良	厳島神社宮司	広島県佐伯郡宮島町	
野依 清		兵庫県尼崎市東園田町4-147-30	兵庫県神社庁参事
野間 秀昭	妙見宗管長	大阪府豊能町能勢町野間中 718	妙見宗宗務所
蓮生 善隆	真言宗普通寺派管長	香川県普通寺市普通寺町 3-3-1	真言宗普通寺派宗務所
鉢呂福太郎	天恩教教主	京都府京都市北区衣笠氷室町 3	天恩教
華園 真準	真宗興正寺派門主	京都府京都市下京区醒ヶ井通 七条上ル華園町 70	真宗興正寺派宗務所
花房 昇	宇治神社宮司	京都府宇治市宇治山田1	
華山 恵光	国清寺住職	岡山県岡山市小橋町 2-4-28	
林 日圓	法華宗真門流管長	京都府京都市上京区恵惠光院通 五辻上ル紋屋町 330	法華宗真門流宗務院
東伏見慈治	青蓮院門跡門主	京都府京都市東山区 粟田口三条坊町 69-1	
広瀬 正三	荒井神社宮司	兵庫県高砂市荒井町千島2-23-12	兵庫県神社庁副庁長
広本 徹隆	増上寺執事長	東京都港区芝公園 4-7-35	
藤井 教雄	身延山東京別院住職	東京都中央区日本橋小伝馬町1-3	
藤田 勝重	大神神社宮司	奈良県桜井市三輪 1422	
藤田 俊教	観音寺住職	京都府京都市東山区泉涌寺 山内町 32	
藤本 勝喜	稲荷神社宮司	長崎県諫早市永昌町 42-13	長崎神社庁庁長
藤目 真良	天台宗参務	滋賀県大津市坂本本町 1771-1	天台宗務庁
古谷 金祐	諏訪神社宮司	千葉県流山市駒木 657	千葉県神社庁庁長
保積 利信	大和教団理事長	宮城県仙台市錦町 2-4-24	大和教団
横場 弘映	和宗四天王管長	大阪府大阪市天王寺区 四天王寺 1-11-18	和宗総本山四天王寺
真嶋 康祐	比叡山延暦寺副執行	滋賀県大津市坂本本町 4220	比叡山延暦寺
松本 実道	真言律宗管長	奈良県西大寺芝町 1-1-5	総本山西大寺
水尾 真寂	天台宗参務	滋賀県大津市坂本本町 1771-1	天台宗務庁
三末 篤實	カトリック広島司教	広島県広島市中区饒町 4-42	カトリック広島司教館
壬生 台舜	泉蔵院住職	東京都台東区浅草 2-31-15	
宮西 惟道	日枝神社宮司	東京都千代田区永田町 2-10-5	
村田 武夫	太郎坊阿賀神社宮司	滋賀県八日市市小脇町 2247	滋賀県神社庁副庁長
村主 恵快	真言宗中山寺派管長	兵庫県宝塚市中山寺2丁目 11-1	
室田 襄	岩屋神社宮司	京都府京都市山科区 大宅中小路町 67	京都府神社庁副庁長
毛利 正明	天台寺門宗管長	滋賀県大津市南園城寺 246	天台寺門宗宗務庁
森 孝純	走落神社宮司	大阪府豊能郡豊能町木代 1556	大阪府神社庁参事
森 武雄	石上神宮宮司	奈良県天理市布留町 283	奈良県神社庁副庁長

森定 慈紹	天台宗宗機顧問会副会長	京都府京都市左京区大原米迎院町	三千院門跡
森本 孝順	律宗管長	奈良県奈良市五条町 438	律宗総本山唐招提寺
守山 良順	聖観音宗浅草寺貫主	東京都台東区浅草 2-3-1	聖観音宗総本山浅草寺
八木 成之	日本聖公会京都主教	京都府京都市上京区烏丸通 下立売上ル	
山上 英夫	貴船神社宮司	京都府京都市左京区鞍馬貴船町	
山口 円道	曼殊院門跡門主	京都府京都市左京区一乗寺 竹ノ内町 42	曼殊院門跡
山田 定憲	天台宗宗機顧問	兵庫県神戸市西区伊川谷町 前開 224	太山寺住職
山本 秀順	高尾山薬王院貫首	東京都八王子市高尾町 2177	
山本 行隆	椿大神社宮司	三重県鈴鹿市山本町 1871	
吉田 智朗	湊川神社宮司	兵庫県神戸市中央区多聞通3-1-1	
吉田 道稔	天台宗宗機顧問	東京都目黒区下目黒 30-20-26	竜泉寺住職
吉田 良武	豊国神社宮司	京都府京都市東山区大和大路 正面茶屋町 530	
横田 茂	寶登山神社宮司	埼玉県秩父郡長瀨町大字長瀨1828	埼玉県神社庁庁長
鷲尾 隆輝	東寺真言宗管長	京都府京都市南区九条町	東寺真言宗宗務庁

【議長団】

氏名	役職名	住所	
亀谷 荘司	日本キリスト教連合 会委員長	千葉県千葉市検見川町 5丁目2213	
鈴木日出年	八坂神社宮司	京都府京都市東山区祇園町北側	京都府神社庁庁長
田澤康三郎	新日本宗教団体連合 会副理事長	青森県東津軽郡平内町外童子山	松緑神道大和山
葉上 照澄	比叡山延暦寺長脇	滋賀県大津市下阪本町 東南寺	滋賀院門跡
広瀬 静水	教派神道連合会理事長	京都府亀岡市荒塚町内丸 1	大本参議
若槻 修造	全日本仏教会理事長	東京都港区芝公園4-7-4(全日仏)	

【常任委員】

氏名	役職名	住所	
〈委員長〉			
岡本 健治	熱田神宮宮司	愛知県名古屋市中区熱田区神宮 1-1-1	神社本庁常務理事
加藤 海晃	日蓮宗宗務副総長	東京都大田区池上 1-32-15	日蓮宗宗務院
加藤 知衛	服部天神宮宮司	大阪府豊中市服部元町 1-2-17	大阪府神社庁庁長
鶴下 博	御嶽教顧問	埼玉県飯能市大字坂元 131	
川井 清敏	WCRP 日本委員会 事務総長	東京都杉並区大宮 2-3-1	大宮八幡宮宮司
桑原 眉尊	曹洞宗宗務総長	東京都港区芝 2-5-3	曹洞宗宗務庁
古賀 制二	真宗大谷派宗務総長	京都府京都市下京区 烏丸通七条上ル常葉町 754	真宗大谷派宗務所

小堀 光詮	延暦寺執行	滋賀県大津市坂本本町 4220	総本山比叡山延暦寺
近藤 説嶺	高野山真言宗宗務総長	和歌山県伊都郡高野町高野山	高野山真言宗宗務庁
佐原 慶治	妙道会教団会長	大阪府大阪市天王寺区 松ヶ鼻町 4-34	妙道会教団
嶋津 正三	熊野那智大社宮司	和歌山県東牟婁郡 那智勝浦町那智山	
杉山一太郎	扶桑教管長代務	東京都世田谷区松原1丁目 7-20	扶桑教
高野 一能	真言宗智山派宗務総長	京都府京都市東山区塩小路通 大和大路東入東瓦町 964	真言宗智山派宗務所
瀧木 正彦	寒川神社宮司	神奈川県高座郡寒川町宮山3916	
武田 斎彦	浄土宗宗務総長	京都府京都市東山区林下町 400	浄土宗宗務所
竹中 玄鼎	臨済宗妙心寺派宗務 総長	京都府京都市右京区花園 妙心寺町 64	臨済宗妙心寺派宗務 本庁
田中 健一	カトリック京都司教	京都府京都市中京区 河原町通り三条上ル	カトリック京都司教館
津田 信基 <副委員長>	長田神社宮司	兵庫県神戸市長田区長田町3-1-1	兵庫県神社庁庁長
津元武一郎	黒住教教務総長	岡山県岡山市尾上神道山 2770	
出口京太郎	大本教主補補佐	京都府亀岡市中矢田町岸ノ上16-1	
寺本 哲栄	浄土宗知恩院執事長	京都府京都市東山区新橋通り 大和大路東入3丁目林下町 400	
長沼 基之	立正佼成会理事長	東京都杉並区和田 2 丁目 11-1	
西田 武	一燈園当番	京都府京都市山科区宮四ノ柳山町 8	一燈園
野口 善雄	全日本仏教会事務総長	東京都港区芝公園 4-7-4	全日本仏教会
長谷川 温信	念法真教教務総長	大阪府大阪市鶴見区緑 3-4-22	念法真教総本山金剛寺
深田 充啓	円応教教主	兵庫県氷上郡山南町村森1番地の1	
前島 宗甫	日本キリスト教協議 会総幹事	東京都新宿区西早稲田2-3-18-24	日本キリスト教会館
山田 正	橿原神宮宮司	奈良県橿原市久米町 934	奈良県神社庁庁長
吉田 俊背	真言宗豊山派宗務総長	東京都文京区大塚 5 丁目 40-8	真言宗豊山派宗務庁
力久 隆積	善隣会教主	福岡県筑紫野市原田 427	善隣会
渡辺 静波	浄土真宗本願寺派総長	京都府京都市下京区堀川通 花屋町下ル本願寺門前町	浄土真宗本願寺派宗 務所

【運営委員】

氏名	役職名	住所	
市原 孝壽	天台宗務庁総務室長	滋賀県大津市坂本本町1771-1	天台宗務庁
岩橋 淳一	カトリック司祭	東京都千代田区 6 番町 10	カトリック中央協議会
大島 宏之	WCRP 日本委員会 事務次長	東京都杉並区和田 2 丁目 6	普門館
大森 龍澄	真言宗智山派法務部長	京都府京都市東山区塩小路通 大和大路東入東瓦町 964	真言宗智山派宗務所

小笠原 忍	日本聖公会司祭	東京都渋谷区東 1 丁目 4-21	日本聖公会管区事務所
岳 尋幸	日牟礼八幡宮宮司	滋賀県近江八幡市宮内町 257	
落合 偉洲	神社本庁渉外部長	東京都渋谷区代々木 1-1-2	神社本庁
小田原利仁	曹洞宗総務部長	東京都港区芝 2 丁目 5-2	曹洞宗宗務庁
梶原 隆也	浄土宗総本山知恩院 公室長	京都府京都市東山区林下町 400	浄土宗総本山知恩院
川島 宏之	全日本仏教会総務部長	東京都港区芝公園4-7-4	全日本仏教会
朽木 明暁	真宗大谷派総務部長	京都府京都市下京区烏丸 七条上ル常葉町 754	真宗大谷派宗務所
桑原 英昭	広島県宗教連盟理事長	広島県広島市西区高須1-8-26	大本広島苑長
<副委員長>			
小林 隆彰	比叡山延暦寺総務部長	滋賀県大津市坂本本町 4220	比叡山延暦寺
小峰 立丸	全日本仏教会国際文 化部次長	東京都港区芝公園 4-7-4	全日本仏教会
今野 栄志	人類愛善会総務部長	京都府亀岡市荒塚町内丸 1	
佐々木 宏	神理教東京出張所長	東京都練馬区石神井台 3-22-10	
鈴木隆太郎	新日本宗教団体連合 会事務局長	東京都渋谷区元代々木町 2-7	
多紀 頌信	妙法院門跡執事長	京都府京都市東山区 妙法院前側町 447	
建内 光儀	神社本庁奉賛部長	東京都渋谷区代々木 1-1-2	
田澤 豊弘	松緑神道大和山教主 秘書室	青森県東津軽郡平内町外厩子山	松緑神道大和山
田中 健一	カトリック京都司教	京都府京都市中京区 河原町通り三条上ル	カトリック京都司教館
田中 恒清	石清水八幡宮禰宜	京都府八幡市八幡高坊 30	
出口 真人	教派神道連合会幹事	東京都台東区池の端 2 丁目1-44	大本東京本部
寺井 種伯	四條暖神社宮司	大阪府四條畷市南野 2-18-1	
杜多 茂夫	全日本仏教会国際文 化部長	東京都港区芝公園 4-7-4	全日本仏教会
外山 勝志	明治神宮禰宜	東京都渋谷区代々木神園町 1-1	
仲田 頌和	真言宗醍醐派宗務総長	京都府京都市伏見区 醍醐東大路町 22	総本山醍醐寺
中田 千朗	世界連邦日本宗教委 員会 常任参与	東京都港区芝公園 4-7-35	増上寺内
中山 知見	浄土真宗本願寺派広 報部長	京都府京都市下京区 堀川通花屋町下ル	浄土真宗本願寺派宗 務庁
西高辻信良	太宰府天満宮宮司	福岡県太宰府市大字太宰府	
1114			
野生司祐宏	全日本仏教会総務部次長	東京都港区芝公園 4-7-4	明照会館内
花井 拓夫	カトリック桂教会司祭	京都府京都市西京区 川島尻堀町 30	

藤 光賢 〈委員長〉		佐賀県神埼郡三田川町目達原	金乗院住職
布施 浩志	立正佼成会渉外部長	東京都杉並区和田 2 丁目 11-1	立正佼成会
細谷浩一郎	新日本宗教団体連合会事務局	東京都渋谷区元代々木町 2-7	
松平 隆基	大本大道場次長	京都府亀岡市荒塚町内丸 1	宗教協力推進室長
松平 定堯	宗教真光奉斎部長	東京都杉並区上高井戸 1-30-51	宗教真光東京事務所
水野 義之	新日本宗教団体連合会事務局次長	大阪府大阪市西区新町 2-18-19-502	新日本宗教団体連合会近畿事務局
三井 勝生	神社本庁秘書部長	東京都渋谷区代々木 1-1-2	神社本庁
南坊城充興	道明寺天満宮宮司	大阪府藤井寺市道明寺 1-16-40	
本原 邦堂	長崎県宗教懇話会代表	長崎県長崎市鍛冶屋町 5 番 87 号	浄土宗大音寺住職
山田 民男	立正佼成会渉外課長	東京都杉並区和田 2 丁目 11-1	立正佼成会
山田 能裕	延暦寺学園常任理事	滋賀県大津市坂本本町 1776	瑞応院住職
山本 行宗	椿大神社綱宣	三重県鈴鹿市山本町 1871	
山本 文彦	熱田神宮権宮司	愛知県名古屋市中区熱田区神宮 1-1-1	
横山 尚空	臨済宗妙心寺派総務部長	京都府京都市右京区花園妙心寺内	妙心寺派宗務本庁
横山 保元	裸教東京教庁総務部長	東京都世田谷区瀬田 4-19-4	
吉井 貞俊	西宮神社権宮司	兵庫県西宮市社家町 1-17	

【事務総長】

氏名	役職名	住所	
江田 廣典	天台宗事務総長	滋賀県大津市坂本本町 1771-1	天台宗務庁

【事務局長】

氏名	役職名	住所	
杉谷 義純	円珠院住職	東京都台東区上野桜木 1-5-3	

【事務局次長】

氏名	役職名	住所	
鎌田 良昭	地福寺住職	埼玉県和光市白子 2-18-1	

【監事】

氏名	役職名	住所	
折茂 正光	新日本宗教団体連合会常任理事	東京都新宿区西新宿 8-3-28	大日然教教主
本間 満	黒住教教主頭問	東京都世田谷区池尻 2-21-18	黒住教東京支庁
吉田 玄蕃	神社本庁事務局長	東京都渋谷区代々木 1-1-2	神社本庁

【事務局】

氏名	役職名	住所	
小鶴 覚禪	比叡山延暦寺法務部長	滋賀県大津市坂本本町 4220	比叡山延暦寺

齊藤 圓真	仏教英語研究会事務局長	東京都文京区白山 4-37-10	竜泉寺住職
林田 正見	仏教英語研究会	東京都台東区谷中 6-2-33	総持院内
松岡 広泰	仏教英語研究会	東京都台東区谷中 7-17-2	了院寺住職
可児 光永	天台宗務庁総務課長	滋賀県大津市坂本本町 1771-1	天台宗務庁内
佐々木光澄	比叡山延暦寺総務課長	滋賀県大津市坂本本町 4220	比叡山延暦寺
菅田 玄光	比叡山延暦寺管理課長	滋賀県大津市坂本本町 4220	比叡山延暦寺
獅子王圓泰	比叡山開創1200年度讃大法会事務局幹事	滋賀県大津市坂本本町 1771-1	天台宗務庁内
白川まさみ	サミット事務局	滋賀県大津市坂本本町 1771-1	天台宗務庁内
平川 尊子	サミット事務局	東京都港区南青山 2-2-15	
ウイン青山 713			
畠山 佳信	立正佼成会渉外部国際課	東京都杉並区和田 2丁目 11-1	立正佼成会
河野 公俊	立正佼成会渉外部国際課	東京都杉並区和田 2丁目 11-1	立正佼成会
松原 通雄	立正佼成会渉外部渉外課	東京都杉並区和田 2丁目 11-1	立正佼成会
阿部 公俊	立正佼成会渉外部渉外課	東京都杉並区和田 2丁目 11-1	立正佼成会
生田 茂夫	新日本宗教団体連合会近畿事務局	大阪市西区新町 2-18-19-502	
鎌田 紀彦	明治神宮総務課長	東京都渋谷区代々木神園町 1-1	
逸見 道郎	浄土寺住職	神奈川県横須賀市西逸見町 1-11	
横山 和人	三千院総務主任	京都府京都市左京区大原来迎院町	
京 康男	三千院納経所主任	京都府京都市左京区大原来迎院町	
杉野 一郎	京都美術研究所	京都府京都市北区上賀茂松本町 18	
内田 陽	聖マリア教会	滋賀県大津市京町 1-2-21	

海外参加者リスト

1. 仏教

- スナオ・ミヤハラ（世界仏教徒連盟副会長、アメリカ）
- 趙 模初（中国仏教協会会長、中国）
- スダス・ウナセカナ（スリランカ上座仏教、スリランカ）
- 唯 覚（天台宗国清寺住持、中国）
- 慈 貴（五台山仏教協会副会長、中国）

2. キリスト教

- フランシス・アリンゼ（諸宗教省長官、ローマ教皇庁代表、バチカン）
- 尻枝正行（諸宗教省次官、バチカン）
- チュング・ヒュン・ロ（世界改革教会連盟副会長、韓国）
- スー・ミン・リー（世界 YMCA 同盟総主事、韓国）
- ディビッド・ヤング（カンタベリー大主教特使、イギリス）
- ハートル・ジョン・ルイス（オーストラリア大主教特使、オーストラリア）
- ウィリアム・H・ホルウェル（米国聖公会大主教特使、アメリカ）
- メトロポリタン・マカリー（ロシア正教大主教特使、ソ連）
- パウロス・マル・グレゴリオス（世界教会協議会議長、府主教、インド）

3. イスラーム教

- モハメッド・ホセム・エルディン（シェイク・アズハル特使、アズハル事務総局局長、エジプト）
- ムサ・M・オマル（世界ムスリム連盟代表、サウジアラビア）
- M・A・ラウフ（国際イスラーム大学総長、マレーシア）
- エクメレディン・イヘサンオグル（イスラーム文化研究所所長、トルコ）
- シャムスディン・カーン・ババハーノフ（中央アジア、カザフスタンイスラーム委員会議長、ソ連）

4. ユダヤ教

- ピンチャス・ブレーナー（ベネズエラチーフラビ、ベネズエラ）
- ヨセフ・B・グレーサー（アメリカラビ中央会議副議長、アメリカ）

5. ヒンドゥー教

- カラム・シン（ヒンドゥー連盟総裁、インド）

6. シーク教

- スージャン・シン・ウーバン（ユニバーサルテンプル、インド）

7. 儒教

- 李 炳主（成均館、儒教本部長老、韓国）

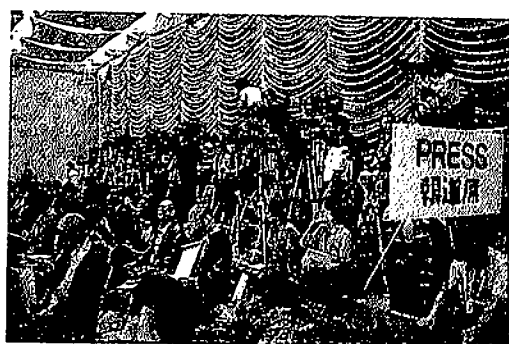
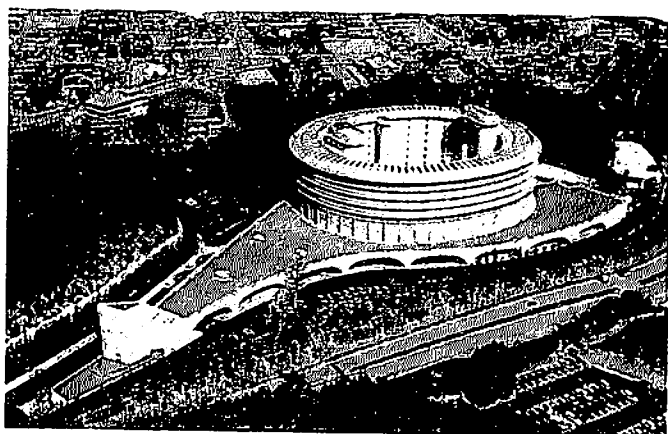
8. 諸宗教組織

- ジョン・B・テイラー（WCRP 国際事務総長、スイス）
- ジェームズ・P・モートン（TOU〈理解の殿堂〉会長、聖ヨハネ大聖堂首席司祭、アメリカ）

9. アッシジの代表

- マクシミリアン・ミッチー（教会一致事務局長、フランシスコ修道会、イタリア）
- トーマス・ミッシェル（諸宗教省アジア・イスラーム担当官、バチカン）

共同記者会見と報道関係者



サミット会議取材する報道関係者
(宝ヶ池プリンスホテル)

サミット会議のメイン会場になった
京都・宝ヶ池プリンスホテル



プリンスホテル内に設けられたプレスルーム



サミット会場終了後の記者会見（延暦寺会館）

世界宗教者平和の祈りのメイン会場となった
比叡山頂の特設会場



「比叡山宗教サミット」に関するマスコミ報道

比叡山で世界宗教サミット

比叡山サミットは、世界宗教サミットとして、世界宗教の発展と平和の促進を目的として、比叡山で開かれる。サミットは、世界宗教の発展と平和の促進を目的として、比叡山で開かれる。サミットは、世界宗教の発展と平和の促進を目的として、比叡山で開かれる。

主催団体を結成

比叡山サミットは、世界宗教サミットとして、世界宗教の発展と平和の促進を目的として、比叡山で開かれる。サミットは、世界宗教の発展と平和の促進を目的として、比叡山で開かれる。サミットは、世界宗教の発展と平和の促進を目的として、比叡山で開かれる。

来夏開催

海外からも30人

比叡山サミットは、世界宗教サミットとして、世界宗教の発展と平和の促進を目的として、比叡山で開かれる。サミットは、世界宗教の発展と平和の促進を目的として、比叡山で開かれる。サミットは、世界宗教の発展と平和の促進を目的として、比叡山で開かれる。

昭和61年8月30日：京都新聞朝刊

アッシング後へ高まる期待

[illegible]

今回（つまりは）ロッキンガム
の相違を、相互に訂正する
ハナハバロロのむかし
に於ては、**オ、フリカ、ソ、**
東などか、あるも**京**の
代名詞かゝる。此ハ
救、**神道、イスラム、ヒンズ**
（左記）（右記）
の相違を、相互に訂正する
ハナハバロロのむかし
に於ては、**オ、フリカ、ソ、**
東などか、あるも**京**の
代名詞かゝる。此ハ
救、**神道、イスラム、ヒンズ**
（左記）（右記）

そしてキリスト教も、ローマカトリック、ギリシヤ正教、ロシア正教、英国国教会（聖公会）やプロテスタント諸教派、YMCA、YWCA……と、皮膚の色もさまざま、全世界からの参画だった。

日本から9人参加

日本からは、仏教僧人（天台宗、真言宗、浄土宗、密宗、立正佼成会）、神道二人、新宗教團體（世界平和日本宗教連合会）一人、キリスト教（福音会）一人、カトリック二人、あわせて九人だった。

この日本の参加者たちに、盛岡市と米代への期待を聞いてみる。

山田恵純天台厚志会（宗教）



10月27日、「世界平和の祈り」でソビエト連邦を
行進するヨハネ・パウロ二世（中央・白髪）

力量問われる宗教者
比叡山サミットに注目

[illegible][illegible][illegible]

「さういふ声もある。『祈りは
置かれて』『マシ』の成集は
大きかつたと思う。が、今回のは
祈りの外側には人々には何
か不足のなきが残つたのでは
ないか。今後、平和をめざすとい
ふかきとして、何か討議の場が
できないか。また、平和に直接
つながらず其間の事業が進められ
ればと望む。」（昭和七年上旬末）

予定されている宗教者マツトは「アッシリ」二機の二つの道徳をもちあはれている。山田大台座主らが高僧を招じてアッシリにゆけつ、ローマ法王に比喩山への招請状を手渡したのも、その意図でのめらわれてあった。

(外村 因彦) 国学院大学員・卒業

<<<<2

「それなら、それは平和とどういふ関係があるものか。」

全日本 会長

阿部野 竜正師(74)

「現代」も問いかけ

「うがう、うがう」といって泣きながら

[illegible]

を思はれてゐるが、しかし人間は根が動物なんです。大食肉です。本心はなまぐらになつてしまふ。宗教的な道徳観を打つて(なまぐら)をどうと云ふことが随分困難で、人間が足りなくなる。人間日々殺してしまつて、それと求めなくなる。そして、何か人間に要するところとある。現代の人間は四分、甘んじてゐるやうに思つてゐるが、四の二ででもなすやうな、いづれは種がなくなつて、今は何



あへのりうじょう 蘆野
山景宗長。大正元年、兵庫
第三國語生まれ。蘆野山大学
字臨海校字科卒。昭和四年門
学校卒。昭和十二年大府寺住職。

らかの手段で人間を磨く試験を提す。といふことが必要ではないか、これには教育の場だけに限りません。政治でも、そうです。人間は困つたときにはあわてて二年懸命になるが、困らないと怠つて一年でえりみない。これが人間の本性の弱さなんです。それが即大に現れてきてゐるのが世代だと思つてゐる。

それを期らせていくのが本意であらう。が、たゞ残念なことに、宗教者自身身が、ではどうしてはばよかかわらぬか、ではないのが本意であることに思ふ。う、これでは困る、神や仏に頼れ合ふ事を説く、もつとつていかにけられぬものはないだろうし、宗教者自身はまれば、君にして、要を擧げていくことも大層な事だと思ふ。いま後は人の心腹成が(「新子」)

「仏教は善人が集まる、これを善團體
行(ぎょう)という。そしてこの善團體は
いつとがいつとでなくなつてありま
す。われわれ自身も皆、仏に参(まゐ)り
てあればいよいよ善に近づいて現
る。今度のサミットは、その仏教精神
を改めて見直す機会にしたい。」

宗教サミット開幕

「和」への思いを国「和」がかなうことを願う。宗教者たちが一貫して「三日月旗」を旗として掲げた。これは、日本に於いて、宗教者たちが掲げた旗は、この旗が初めてである。この旗は、日本に於いて、宗教者たちが掲げた旗は、この旗が初めてである。この旗は、日本に於いて、宗教者たちが掲げた旗は、この旗が初めてである。

「三島は、代官が来ない。國を治り得てゐる。其人の道を得る者だけを擧げたい。一々、國では三島は仰りのおれ」と同サマは語つてゐたのであられ。今なら國政府や家族を以てに三島を擧げられ、三島の御用もせられ。

「真実の心語れば」
対立、厳しい一面も

[illegible][illegible][illegible]

「現実のすり替え、無意味」



「豆類サミットを閉る兼食」で報告する呼び掛け人

一方で批判集会

は、新出のガミントが、新聞を道へるが、や、ゆりよ、字、ホテル、四と一、時間以上、も、
た、三日、母、ミツに、四、道、在、野、の、宗教、家、た、約、六十、人、聞、者、なる、場、が、あ、つ、た、

スピーチのなかにも、

また、バザール・ソートワークのダンバー十数人が、朝食に先立ってサミット会場の奥庭でクレープ・ソース・ホテルを飾り、サミット出席者へのビラ配布と質疑求めのため、会場入り口で入場者を待ち受けるホテル側と一時間以上お話し合はれた。

きょう広島「原爆の日」

首相も参列 平和祈念式



原爆資料館を見学する京教サミット参加者の一行
(広島市中区・平和記念公園)

核の脅威ひしひし

京教サミット 参加者一行 原爆資料館を訪問

「広島山宗教サミット」に
参加後、広島市内外の
宗教者ら約七十人が五
日、広島市中区・平和記念公
園の原爆資料館や原爆慰霊堂を
訪れた。

午後二時、一行は山宗和
宗大司教に先導され、原爆資料
館に到着した。一行は、原爆資料
館のめいめいと平和祈念式を祈つ
た。

一行のうち海外宗教代表は
十三人で、広島は初めての人
がほとんど。この後、原爆資料
館の解説のすまじきとを
伝える資料ビデオを観た。

「広島」の現状は知識として知
つてはいたが、こんなに身近に
受けて核の脅威を感じたのは
初めてだ。

慰霊堂や供養塔は、暗黒者や
悪魔が手向ける香炉が待った
なびいた。

首相が広島入り
中、首相府は午後六時
頃、広島市で六日開かれる京
教サミットに出席した。

料館の隣には式典を執り
行なう大ホールが建ちあがり、
準備は整った。

式典には、三百名の参列と
なる中、山宗和宗大司教の
代表、山宗和宗大司教の代表
や、山宗和宗大司教の代表
や、山宗和宗大司教の代表
が出席する。六日午後
開かれる「サミット」のバ
ネリストも、原爆資料館に取
り組む。

広島は五日、四十二回目の
原爆の日を迎えた。午前八時
から、山宗和宗大司教の代表
や、山宗和宗大司教の代表
や、山宗和宗大司教の代表
が出席する。六日午後
開かれる「サミット」のバ
ネリストも、原爆資料館に取
り組む。

式典会場となる平和記念公
園の原爆資料館前広場には、
五日までに約二万
二千のいすが並べられ、原爆

[illegible]

宗教不一致

A サミット会議のあいさつに文部大臣を招く計画が主催者側にあった。キリスト教



サミット成果を思い思いに語る海外代表——平和の祈りがどう生かされるか………比較山形県庁舎で4日

対話の意義は大きい

舞台裏

D「新りの式典」では、新宗教の新しい儀式に因ずることができると期待したが、ほとんどが自立不動で新りの言葉を述べるだけで、がっかり。もう少し敬けんな雰囲気のための演出があってもよかった。

歎念だった。イスラム教教師の
の最高指導者、ガダエル・ハ
ック師も欠席、アメリカイン
ディアン代表も、サミットに

祈りで平和にどう貢献

記者座談會

も考えられたと思うのだが……

同座なかった。会場も、ロビーでもメッカリの事件にばかり触れない。国連の宗教者の中からは、異端で世間じつとも聞いた。口には宗教者だと言いつつも市井の俗力に言いながら、肉まは共感に人へん。

限
界

にしても、本時に臨席サミ
ットを動かさうとのには、
九十一歳の田中首相と天皇
主唱いと弱の人々だ。

B 反サミットグループが
合議を助ねる、主唱組は
話を聞くこともせず怒り
だ。批判の中に耳を傾けるこ
とが聞かされたのが、

A 旗幟を掲げれば、
数山マッセンでは「紛争の
解決、軍縮」という政治的切
題に臨み込んだ。ところが、
具体的に宗教政治とかうか
わっていないのかという疑
心が残っている。そののと
ころが聞かされたのが、

「立ってをむがける」なうも
しやうやいふやうでた。

B 日本の宗教代表者による領土争い。京都見物に時間がかかり、歓迎式典に間に合わなかった海外代表もいた。

期待

A とは言え、世界七大宗教の代表が一堂に会して祈りの場を共有し、平和をテーマに対話のテーブルに留めたこ

E 一回だけの打ち上げ花
火では現実の政治のやみを照
らしきれない。
C 昨年十月のアッシジ集
とは評価している。
B バチカン記者の西ドイ
ツ人は「アッシジは折りだけ
だったが、今回は対話が過み

[illegible]

「天竺の山(名)は右翼か」と詢問された、好味的だと返われている民族宗教が移加してゐるための誤解だろう。大教団が力を顕示し、ミニ教団の諸宗教とのパイプをつないだという品で、宗教界の再編成といえなくもない。

感り込んだ情に出るの立場に立つて心を配らねばならぬ」とと銘にあらわされた。

B 日本の宗教改革者による顕れが、会だつた。京都植物に時間がかかり、新制度向に間に合わなかった代表もいた。

C 現代の世界情勢の中で宗教者の取り組むべき課題も

サマツの評價が出来るのは、すつ後のことだつた。比叡山の奥で、宗教者の階段を二歩上つた位留つてた

期待

あとがき

「比叡山宗教サミット」は、内外に大きな反響を呼びながら二日間の幕を閉じた。そして構想の誕生から報告書の完成まで二ケ年余の歳月が流れ去ろうとしている。今回の「比叡山宗教サミット」の特徴は、その名称の通り、世界の主たる宗教組織を公式に代表した宗教指導者が一堂に会したことである。それゆえ本書は、単なる二日間の記録に留まるだけでなく、そこから世界の宗教交流の動向を如実にうかがうことができるし二十一世紀を目前に控え、宗教の歴史が大きく転換しようとしていることを知ることができよう。

二十世紀の後半は、宗教対話の黎明期といえる。世界の各地で宗教協力に関するいろいろな試みが行われるようになったからだ。事務レベル、学者レベル、一般市民、青少年、そしてボランティア活動、平和運動、人権運動等、あらゆる機会、機関を通じた宗教を越えての多面的な接触は、やがて宗教指導者の交流をも可能にしたのであった。

昨年十月にローマ教皇の呼びかけによるアッシジ平和祈願会があったが、その精神を引き継ぐ「比叡山宗教サミット」は、主催宗教が一つではなく、日本の主たる宗教が一致協力して世界に訴え開催したという点において、またメッセージを採択したという点において、アッシジの精神をさらに

深いものにして未来に引き継がれることを確信している。そしてサミットが終わった今、開催地、比叡山を開創した最澄上人の「能行、能言（まず実践、そして同時に言論を通じて敷衍するの意）」という言葉が彷彿として浮かんでくるのである。

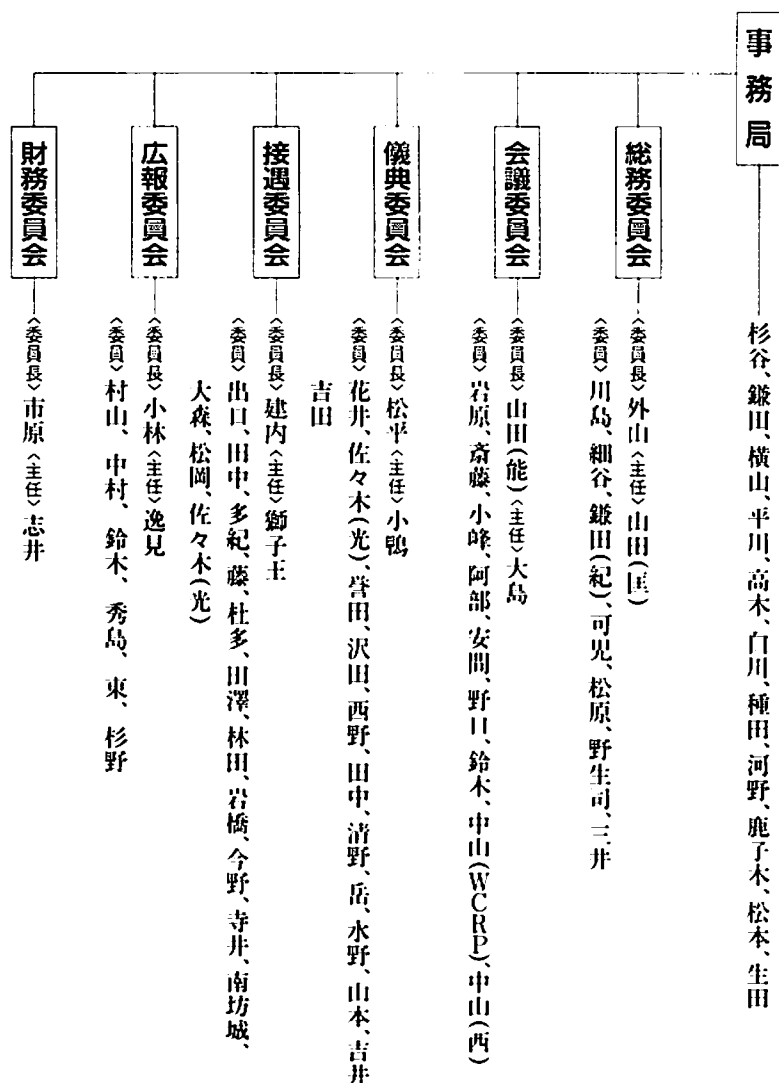
なお、報告書編集集中に、INF廃絶をめぐって米ソ間で基本的な合意に達した、とのニュースがとび込んできた。このようなテンポの速い歴史のうねりの中で、完璧を期す余りいたずらに時を移すことなく、まず記録を伝えるという方針で報告書の編集はすめられ、また冒頭の写真頁については写真構成のみを配慮して行なったもので、日時、順序等は不同である。

最後に御協力をいただいた委員長各位、並びに佼成出版社に甚深の謝意を表する次第である。

比叡山宗教サミット事務局長 杉谷義純

比叡山宗教サミット実行委員会

事務局体制としては、運営委員会のほか、以下の実行委員会が組織され、実務に当たった。



写真撮影 小林謙介

齊藤貢一

福島一嘉

飯田文雄

菊池東太

編集協力 齊藤佳子

編集製作 三原嘉幸

装丁・レイアウト 仁田和男

比叡山宗教サミット

世界宗教者平和の祈りの集い

非売品

発行日——昭和六十二年十一月十二日

発行所——滋賀県大津市坂本本町

天台宗務庁内

電話〇七七五(七九)〇〇三二

発行人——日本宗教代表者会議

印刷所——新興印刷製本株式会社

佞成出版社印刷部

製本所——新興印刷製本株式会社

of compassion,'...", thus expounding on the vital importance of this spirit of collaboration between religions.

Inspired by the words of Saicho, whose 1200th anniversary of the founding of Tendai we are celebrating this year, we would like to hold a religious summit conference for this summer, August 3-4, 1987, on Mt. Hiei, Kyoto, Japan, entitled: Religious Summit Meeting on Mt. Hiei. To this conference we would like to invite not only the various leaders and supporters of religious movements in Japan, but scholars and representatives of religious leaders from around the world. We do this in a spirit of prayer for world peace, to help towards mutual understanding and to forge closer bonds among religions, and to work towards the goal of world peace. The conference entitled the Religious Summit Meeting on Mt. Hiei, will be hosted by the Japan Conference of Religious Representatives, an organization represented by five organizations supporting the Japan Federation of Religion and with the collaboration of the Japanese Committee for the World Conference on Religion and Peace and the Japan Religious Committee for the World Federation. As host organization, the Japan Conference of Religious Representatives will exert every effort to ensure the success of this great summit meeting of the religious leaders.

Religious Summit Meeting on Mt. Hiei

Today's world is preoccupied with conflict. In almost all fields of endeavor, political, economic, cultural, and communication, differences separate us making difficult the task of finding true world peace.

In our modern times, the startling progress of science and technology has brought about a state of wealth and luxury but also disparities and strains. There seems to be no end to the desires people entertain in the material civilization. The true salvation of mankind indeed lies only in the religious mind inherent in man.

But what if the religions of the world the fountainhead of the religious mind were to be engaged in fights among themselves or lack total understanding of each other? Throughout the long history of mankind, religions have played invaluable roles. But it is also true that in not a few instances they have added more fuel to conflicts between ethnic groups and between nations. That is why one of the deepest responsibilities of the religious leaders is to come together in a supra-religious collaboration to help shape the future of the mankind. This in turn will help the religious leaders to accomplish their solemn duties to mankind.

For these reasons, the past ten years have seen a concerted effort on the part of religious leaders and scholars for ecumenical dialogue. It is certainly a movement to be justly happy about, and can be credited to the efforts of the venerable religious leaders. To use our concerted efforts and exercise respect for other religions in order to strive for true world peace is something that manifests the real heart of what men and women of religion are. Gradually, the results of serious talks and actions of religious leaders linked by the bondage of religionists in their efforts to protect the most vital yet constantly threatened issue of peace, human rights and ethics are beginning to be felt. Such endeavours must go on.

Pope John Paul II, when he addressed a group of Japanese religious leaders when he visited our country in February 1981, said, "Let us recall the teachings of your great spiritual leader, Saicho, who said 'To forget the self and work for the good of others is the highest form

May our example of coming together here to pray for peace be followed and multiplied elsewhere in the world, and may the great gift of peace, for which all humanity yearns, be granted in our time.

A Message from Mount Hiei (Draft)

We, representatives of various religions of the world, gathered to pray for peace at the "Religious Summit Meeting on Mt.Hiei", Kyoto, Japan, on the 3rd and 4th August, 1987, on the occasion of the one thousand two hundredth anniversary of the founding of Mt. Hiei, think it appropriate to send a message to all believers and people of goodwill who are sincerely concerned about world peace.

Our being together here to pray for peace signifies a continuation of the same open spirit in which the Day of Prayer was observed at Assisi in October 1986, when the leaders of different religious traditions came together to pray for peace. Their intention was to offer to the suffering world of today a powerful witness to the common commitment of religions to peace and to the cause of man, while all remained true to their own religious backgrounds and retained the identity of the faith of each.

We recognize and affirm that the search for peace is a fundamental aspect of every religion, according to which peace is not merely the absence of war, but the state of fraternal concord and the realization of the unity of the whole human family. Peace cannot exist without justice and love. As such, the desire for peace must be sincerely fostered by the followers of all religions.

When we pray, we cannot but confess our unworthiness for the task of peace. Therefore we pray for our own inner renewal, so that we may be more faithful to our commitment to peace. Praying for peace involves also working for peace, and even suffering for peace. Service and sacrifice for this cause takes different forms and methods, such as working for the resolution of conflicts, disarmament, development, the preservation of the environment, human rights, care for refugees, and the transformation of unjust social systems. Religious people have to make "a preferential option for the poor."

Our task is enormous and our own strength is insufficient. Thus we seek to go forward in the power of prayer. We are confident that the Supreme Being hears our trustful prayers and listens to our supplications. Prayers and meditations cleanse our hearts and souls and make us humble instruments of peace.

